家族の絆を求めて

胡蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家族の絆を求めて

【Ｎコード】
Ｎ９９１３Ｕ

【作者名】
胡蝶

【あらすじ】
◆元・お姉ちゃん注意報◆万事屋に突然やって来たのは神楽のお姉ちゃん！？優しいけれどなんか怖い！…そして彼女は、何か過去に『罪』を犯したようで……？彼女の目的とはいったい！？

いいことは連続して続かない（前書き）

完璧オリキャラです。
苦手な方は注意してください！
それでは、どーぞ（＾Ｏ＾）！

いいことは連続して続かない

「キャッホオオオイ！また私の勝ちアル！！！」

左手で酢昆布をかじりながら、右手に持っていたカードをバッと投げる。

目の前では悔しがっている銀ちゃんが『ちくしょー、もう1回だ！』と言っている。

……そう、私たちは今、『ＵＮＯ』をやっているのだ。

なんでかって？

依頼がなくてすることがないからに決まってる。

というのも、かれこれ1週間は依頼がない。

三食豆パン生活にもそろそろ飽きてきた。

……ああ、卵かけご飯が食べたいなあ。

そんなことを思っているうちに、いつの間にかまた銀ちゃんに勝っていた。

今日の自分は調子がいいな、と思っていると、銀ちゃんが言った。

「…にしてもよォ……二人でＵＮＯとか、俺ら寂しくね？」

「何アルカ、銀ちゃん？負けっぱなしだから他のやりたいアルカ？私はどっちでもいいアルヨ～」

「ばっ、そんなんじゃありませんけど？やってやろーじゃねえか、一生『ＵＮＯ』！！！」

一生でもなんでもやってろ、そう悪態をついていると、ピンポーンとインターホンが鳴った。
瞬間、銀ちゃんと視線がぶつかった。
……もしかして、依頼？
銀ちゃんも同じことが頭に浮かんだんだろう、お前出ろ、というような目を向けている。
……ああ、そういえば今日、新八いないんだった。
雑用係の新八が。
私は銀ちゃんに『やだネ』と口パクで言い、右手を上げた。
それを見た銀ちゃんも、右手を握りしめる。
万事屋恒例、ジャンケン勝負だ。……結果、お互いが出したのは、
私がグー、銀ちゃんがチョキ。
私の勝利だ！
銀ちゃんが膝をついて落ち込んでいると、もう一度インターホンが鳴った。
私が鼻で笑うと、銀ちゃんは悔しそうに玄関に向かっていった。

「はいはい！今出ますって！」

そんな怒りながら出て、もし依頼だったんならどうするんだろ。
……それにしても、今日の私は本当にツイてる。
今なら海賊王になれそう。
そんなことを思っていると、銀ちゃんが顔を出して言った。

「神楽、お前に客だけど」

「私に？……出るの面倒臭いからいないって言っといてヨ」

「ったく、ほんとお前は……」

そう言いながら玄関に戻っていく銀ちゃん。
…なんだか銀ちゃんが私の言うことをなんでも聞いてくれる召使いのように思えてきた。
なんたって私は、かぶき町の女王なんだから！
ムフフフ、と心の中で笑っていると、銀ちゃんの声が聞こえた。

「あっ！ちょっと、アンタ！」

どうやらその声を無視して、私に用があるというその人物は、万事屋にあがってきたようだ。
私はいつも銀ちゃんが座っている席についた。
なんか一番えらい人が座る席みたいに見えるから。
背を向けながら、気配でその人物が居間に入ってきたのを確認し、言った。

「この私に何かご用かしら？……残念だけど、今日はスケジュールがいっぱいなの。また今度にしてくださりません？」

決まった……！
そう一人で思っていると、その人物は口を開けた。

「……ありゃりゃ。見た目はもちろんだけど、態度もでかくなったみたいね。胸の大きさはあまり変わってないみたいだけど」

「んだとコラァ！？人が気にしてることをよくも……！」

……て、あれ？
私のことを、知ってる？
でも、私はこの人を知らないような、知っているような……。

「あり？もしかして忘れちゃったの？私のこと。……神楽」

そう言いながら、その人物は体を隠すように被っていたフードや上着を脱いだ。

サラリ、と長い髪が揺れた。

その髪の色は……私と同じ、オレンジ色。

まさか……この人は。

「……神那（かんな）？」

「…まあ！呼び捨てじゃなくて、他の呼び方があるじゃない。……言ってごらんなさい、神楽」

ニッコリと笑顔を浮かべながら言う神那。

その笑みは、アイツに似ている。

……神威に。

情けない話だが、恐ろしいと思ってしまったのも事実。

私が折れるしかなかった。

「……神那姉（かんなねえ）」

「よくできました。……やっぱりお姉ちゃんってのは敬われるものでなくちゃだめね～」

頭をポンポン、と撫でられる。

そこで、一人状況を飲み込めていない銀ちゃんが言った。

「……え？神楽の姉ちゃん？……え？」

神那……じゃなかった、神那姉はくるりと銀ちゃんの方を向くと、言った。

「そう。私は神楽の姉の神那。よろしくね」

「……え？えええええええええええ！？」

銀ちゃんが叫び声をあげる中、私はため息をついた。

……人生ってほんと、平等にできてるんだなあ。

それを思い知らされた気がした。

いいことは連続して続かない（後書き）

……皆さんお久しぶりです。
最近忙しくて全く更新できていなかった胡蝶ですｏｒｚ
海底くらげさんの了承を得て連載している『例えばもう一度あなたに会えるとして、』も全く更新できていないのに、また連載小説を投稿してしまいました！
しばらくこっちを投稿すると思いますです（、；ω；、）

恐らく（たぶん絶対）亀更新になると思いますが、応援よろしくお願いします（＾Ｏ＾）！

人は見た目で判断できない

目の前のソファーに座って茶をすすっているのは、神楽の姉こと、神那という女。
……つーか、神楽に姉ちゃんがいたなんて初耳なんだけど。
あのハゲ（星海坊主のこと）、一言もそんなこと言ってなかったじゃねーか。

「……アンタさ、ほんとに神楽の姉ちゃんなの？」

「そうよ？私たち、そんなに似てないかしら？」

「いや、髪色とかは似てるけど…神楽（こいつ）と違ってほら、ボンキュッボンってゆーか」

――――ガン！

言い終わる前に、神楽のアッパーをくらった。
上空に吹っ飛んでから天井に激突して、ソファーに着地する。
隣に座っていた神楽はそれを器用によけた。

「ありゃりゃ、あなたもそんなに乱暴な子に育っちゃったの？神威に似てしまったのね」

「……アイツと一緒にするなヨ」

「同じよ、あなたたちは。何せ、血の繋がった兄妹ですもの」

「……アンタも一緒でショ」

「アンタ、じゃなくて『神那姉』でしょ？…まったく……神楽がこんな風に育っちゃったのは、あなたのせいでもあるのかしら？」

そう言いながら、彼女は俺の方を見る。
ビリビリと殺気が伝わってきて、思わず木刀に手をおいた。
そんな俺の前に立って、手で制すと、神楽は言った。

「……今さら何しに来たアルカ。銀ちゃんは、私の家族なんだヨ。銀ちゃんを傷つけるなんて、私が許さないネ」

「……家族？笑わせないでよ。あなたと私が本当の家族じゃない」

「違う。私が物心つく前から家出してたアンタなんか、家族なんて認めないアル。アンタと過ごした記憶なんか、私の中にはこれっぽっちもない。……マミーが死んだ時だって、顔も出さなかったくせに」

ピクッ、と彼女が反応した気がした。
神楽はなおも続ける。

「私は地球（ここ）に大事な人たちができたネ。それを傷つけるってんなら、私が許さな「……ヘェ」

一瞬のうちに彼女は視界から消えて、俺の後方に立っていた。
不気味に笑いながら、俺の首もとに神楽と同じ色の番傘をつきつけ

ている。
そして、言った。
「じゃあこの人を殺せば、あなたの本気が見れるのかしら？」
「ッ……やめロ！！！」
そう言いながら、神楽も彼女に傘を突きつける。
神楽が引き金を引こうとしたその時には、彼女はすでに俺の後ろから消えていて、神楽の後ろへと移動していた。
そして同じように、神楽に傘を突きつける。
「動くんじゃないわよ？動いたら首が吹き飛ぶから」
そんな物騒なことを笑顔で言うこの女、やはりアイツに似ている。
神楽の兄、神威に。
いや、神威が彼女に似ているというべきなのか。
ゴクッ、と神楽が唾を飲み込む音が聞こえた。
「んー、やっぱりまだまだ弱いみたいね、あなたは。……でも、お姉ちゃん安心したわ。あなたは神威と違って、大事なものを見つけられたようね」
「「……は？」」
「守りたいと思えるものを」
「……」
「そう思ったんなら、逃げ出しちゃだめよ？」

「……ウン」

それを聞いてニッコリ微笑むと、彼女は神楽から傘を放し、俺の方を向いた。

「乱暴なことをしてごめんなさいね。神楽がどんな子に育ったか、見極めたかったの。……私のことは神那って呼んでください」

「はあ……」

「……ところで、あなたは？」

「俺？……俺は坂田銀時。ここ万事屋…まあ、何でも屋のオーナーみてえなもんだ。銀ちゃんでも銀さんでも、好きに呼んでくれ」

彼女――神那は、しばらく考えこんでから言った。

「じゃあ銀さんでいいかしら？」

「はいよ」

「……あの、」

「なんだ？」

「ここ、何でも屋って言ってたわよね？」

「そうだけど」

「それなら依頼があるんだけど、いいかしら？」

その瞬間、何か嫌な予感がした。
なんたって、こいつは神楽の姉ちゃんだぞ？
確実に厄介なことを言ってくるに違いない。

「内容によるんだけど」

「断ってもいいから、聞くだけ聞いてくださる？……実は私、仕事をやめさせられちゃったの。それで住むところがないわけ。だから、しばらくここに泊めさせてもらえない？」

案の定面倒なことキタ――――！
断りたい！激しく断りたい！
この人、ニッコリウインクなんかしちゃってるけども、目が全然笑ってねーよ！
むしろ『断ったら殺す』的なノリだよ絶対！
…神楽、助けてくれ！！！
そう思いながらちらりと神楽の方を見ると、ただ首をぶんぶん振っているだけで、助け船を出す気はまったくなさそうだ。
視線をおろすと神那と目が合ってしまい、ニッコリ微笑まれた。
だめだコレ、断れねェ……！

「……その依頼、引き受けます」

「やった！ありがと銀さん！神楽、銀さんっていい人ね！」

「……」

「どうしたの、神楽？お姉ちゃんとこれから一緒に暮らせるのよ？

嬉しくないの？」

しばらくその場に突っ立っていた神楽だったが、やがてプイッとそっぽを向き、隣の部屋に入っていってしまった。

「アンタ……結構神楽に嫌われてんだな」

「当たり前よ。あの子が生まれてから二年で家出したのよ？母さんの葬式にも出なかった私なんか、好きなわけないわ」

「……なんで家出したんだよ？」

「それは秘密。神威にしか知られてないわ。……いつかは、話そうと思ってる」

「なんで、あのガキは知ってるわけ？」

「神威のこと？……聞かれちゃったから、かしら」

「…ふーん……てかアンタ、いくつ？」

「やーね、女に年齢を聞くなんて不躾よ。…まあ一つ言っとくならそうね……あ、神楽とは十歳くらい離れてるわよ？」

「……まじで？」

「まじで」

そう言ってクスクス笑う神那を見て、これから先が不安になった。だいたい、仕事クビになったって、いったい何の仕事？

なんかヤバめの仕事じゃね？
面倒なことに巻き込まれるのはごめん被りたい。
いや、つーか自分で面倒なの抱え込んじゃったわけだけれども。

…新八ィィィィ！
早く帰ってきてくれェェェ！
お前をこんなに重要視したのはいつ以来だ？
あっ、トイレットペーパーがなくなったとき以来だ！
とにかく……新八ィィィ！
早く帰ってきてェェェェェ！

笑顔の裏には必ず何かがある（前書き）

みなさんんんん！台風は大丈夫でしたか（´；ω；｀）！？
私は雨がこれからひどくなって電車が止まるかもと思って学校休みました（´∀｀）
まあ雨はまったく降っていませんし、電車もバリバリ元気に走ってますが（笑）
学校さぼれてよかったです☆

それではどーぞ！

笑顔の裏には必ず何かがある

―カン、カン、カン――――
僕、志村新八は、万事屋の階段をゆっくりと上がっていた。
耳にはヘッドフォン、曲はもちろんお通ちゃんの曲。
それも、昨日買ったばかりの。
ここまで言えばわかるだろう、僕は昨日、お通ちゃんのライブに行っていたんだ。
僕にとっての至福の時間。
万事屋にいては、基本はただ雑用しかやらされないので、いい気分転換になった。
また今日から雑用だな、きっと…という暗い気持ちを吹き飛ばしてもらうように、お通ちゃんの曲を聞きながら来たのだ。
玄関の前に立ち、まずは銀さんたちを起こすところからだな、と思いながら、ヘッドフォンに手をかけた。
……バイバイ、お通ちゃん。
帰りまでお別れだよ。
心の中でそう言い、ヘッドフォンを懐にしまうと、玄関を開けた。
「おはようございま「二人とも！早く起きろって何回言ったらわかるのよ！？」
……え？
誰だろう、この声。
まさか、また八郎さん……じゃない、狂死郎さんのお母さん？

…にしては、声が全然違うような気が……。
とりあえず中に入ってみようと思い、靴を脱いで、居間に向かう。
居間に着くと、そこに立っていたのは赤橙色の長い髪をした女性。
ふと、最近あったイボによる二年後事件を思い出した。
まさかね、そう思いながらも、口は動いていた。

「――――神楽、ちゃん？」

僕に気づいたその人は、ゆっくりと振り返る。
顔を見ると、本当に二年後の神楽ちゃんに似ていた。

「神楽ちゃん……いや、神楽さん！めずらしいね、早起きなんて！
……ところで、なんで二年後の姿になってるんですか？」

「……何言ってるの、あなた？てゆーか、あなた誰？」

「……はい？」

そう返したところで、銀さんがいつも寝ている寝室の襖がスーッと開いた。
そこから這いつくばって出てきた銀さんが、眠そうな目をしながら言った。

「ああ……そーいやお前、昨日いなかったんだっけか。そいつ、神楽の姉貴の神那。今日からここに居候することになったから」

「…え？神楽ちゃんのお姉さん？えェェェェェェェ！？」

＊＊＊

「……なるほど。神那さんは神楽ちゃんたちのお姉さんで、依頼しに万事屋に来たと」

「依頼っていうか、泊まらせてもらってるだけだけどね」

「そうなんですか……。でも、居候というか、逆に世話してもらっちゃってるんですけど。……このご飯も、神那さんが作ったんですよね？」

「よくわかったわね」

「わかりますよ。銀さんにそんな技術ないですから」

「ふふっ、そうなの？」

「ええ。……ところで、神楽ちゃんは？」

そう問うと、今まで黙々と朝食をとっていた銀さんが言った。

「まだ寝てる。一緒に食べたくねーんじゃねぇの？」

「……え？…それって、どういう……」

銀さんが口を開こうとしたとき、神那さんがそれを制した。
私から話すわ、そう言いながら。
そして僕は聞いた。
神那さんは神楽ちゃんが物心つく前に家出したこと。
お母さんの葬式に出席しなかったこと。
神楽ちゃんが神那さんを好きなわけない、ということ。

それを聞いて、なんだか申し訳ない気持ちになった。

「…すみません、辛いこと話させてしまって」

「なんで、新八くんが謝るのよ？……全部、私が悪いだけなんだから」

「……もう一つ、聞いてもいいですか？」

「なあに？」

「どうして坊主さんは、神那さんのことを僕たちに言わなかったんでしょう？」

「……坊主さん？」

誰？というように首をかしげる神那さん。
ああ、坊主さんは僕が使ってる固有名詞だった。
星海坊主さんです、と続ける。
すると神那さんは、父さんのことね、と納得した。
ハゲでいいわよ、とも続ける。

「……さあね。でも、知られたくなかったんじゃないかしら。一人だけじゃなく、二人も自分から離れていったって。それって、父親として恥ずかしいって思ってるんじゃない？あの人、案外プライド高いから」

「そうなんですか……」

そう言うと、ガララッと襖が開く音がした。

その方向を見ると、いつものチャイナ服を着た神楽ちゃんが押し入れの前に立っていた。

「…あ、おはよう神楽ちゃん。朝ごはん「いらない」

そう言うと、神楽ちゃんは自分の番傘を持って、玄関の方へと歩いていった。

「ちょっと神楽ちゃん、どこ行くの！？」

その問いに答えず、神楽ちゃんはさっさと出ていってしまった。
振り返ると、神那さんと目が合った。
神那さんはにこりと笑う。

「心配しないでいいわよ、新八くん。ゆっくりでいいの、あの子と普通の姉妹に戻るのは。……もう戻れないかもしれないけど」

「……そんなことないですよ。きっと、戻れます」

「……ありがとう」

そう言ってまた、この人は笑う。
……本当に、この姉妹、兄妹は似てる。
笑うのがうまい。
その裏に隠された本当の感情は僕には読み取れないけれど……。
今の神那さんは、本当に寂しそうに、笑っていた。

笑顔の裏には必ず何かがある（後書き）

感想待ってます！

人を見た目で判断するなってよく言うけどやっぱり危なそうな奴には近づいちゃ

残酷表現含みます。
苦手な方はご注意を！

それでは、どーぞ（＾Ｏ＾）！

人を見た目で判断するなってよく言うけどやっぱり危なそうな奴には近づいちゃ

「……銀ちゃんも新八も、神那(アイツ)姉に騙されてるアル。アイツは私たちを、マミーを捨てて出ていった。神威と同じくらいに薄情もんネ」

……でも、私はアイツの素顔を知らない。
何せ、私は物心もついてなかったんだから。
……もし、もしも私の思い違いだったら？
……ううん、そんなことない。
私は間違ってなんかない。
マミーをみとってすらやらなかったアイツが……！

なんだか頭にきて、足元に転がっていた石ころを思い切り蹴飛ばした。
空中で弧を描きながら飛んでいった石ころは、歩いていた三人組のうちの一人にあたった。
……やっちゃった。
くるりと振り返った三人は、明らかにやくざもの。
面倒なのに引っかかったな、とため息をついた。
三人組は、ゆっくりとこちらに向かってくる。
私の目の前に立つと、石ころが頭にあたったリーダーっぽい奴が口を開いた。

「おいクソガキ！何してくれてんだ！」

「……ごめんアル」
「謝るだけじゃ足りねーんだよ！金出せ、金！」
「……持ってないネ」
「はあ！？んなわけねえだろ！とっとと出せや！」
胸ぐらを掴まれて、頭に血がのぼった。
…どいつもこいつも……！
「……私、今すごく機嫌悪いんだヨ。怪我したくないなら、離れたほうがいいアル」
飛ばした殺気にも気づかず、このチンピラたちはくってかかる。
私にはもう、声は聞こえていなかった。
頭の中で、プツン、と音がした気がした。
何も言わない私に痺れをきらしたのか、一人が私を殴ろうと拳を向ける。
それを軽く避けると、相手の腹に一発くらわせた。
二人目は蹴りを入れようとする。
私はそれを左手で弾いた。
手加減はしていたつもりだった。
だけど、人間の体は私たち夜兎とは違う。
―ボキッ―――
何かの音が、した。
その瞬間、男が叫び声をあげた。
「あッ……足が！俺の足がァ！」

そこで私は、我に返った。
私は、なんてことをしてしまったんだろう。
つまらないことで我を忘れて、人を傷つけてしまった。
これじゃ、神威と同じだ……。
私は動揺のあまり、気づかなかった。
最後の一人が、私にナイフを刺そうと向かってきているのを。
気づいたときにはもう遅かった。
間に合わない……！
そう思って目をつぶった。
だが、痛みは感じられない。
代わりに感じたのは、何かが肌に飛んでくる感覚。
目を開けると、そこには信じられない光景があった。
ナイフを持っていた三人目の男の、首が飛んでいた。
……そう、私の肌に伝わったあの感覚は……この男の、血。

「なんで……？誰が、こんなことを……！」

そう言ってから、何かの視線を感じて振り返った。
背後には誰もいなかったが、まだ何かの視線を感じる。
見上げると、そこには私と同じ番傘を持った人物がいた。
太陽と重なって、誰なのかよく見えない。

「…まさか……神那姉？」

「……違うよ、俺だよ俺」

そう言って地面に着地したのは、神威。
神威はケタケタと笑いながら言った。

「だめだよ神楽、人を傷つけるのが怖いからって、なに死にそうに

なってんの？」

「……うるさいアル。私の勝手だロ」

「ひっどーい。助けてもらったのに、その言いぐさはないでしょ」

「……何しに来たんだヨ。お前も私に何か用アルカ？」

「『お前も』？……ってことは姉さん、やっぱり地球（ここ）に来てるんだ」

「……どういうことネ？」

「そっかあ……姉さん、仕事やめちゃったんだ」

「…私の質問に答えるヨロシ」

そう問うと、そのままの意味だよとはぐらかされる。

……なんで神威は知ってるのに、私は知らないんだろう？

自分だけ、疎外されているような感じがした。

神威は遠くの方を見ると、ぼそりと言った。

「どうやら、お前のことを探しにきてるみたいだね。……さて、俺は帰ろうかな」

そう言いながら背を向ける神威。

私はそれを、待てと制す。

神威はぴたりと止まった、と思うと、ああそうだ、と続けた。

「神楽。お前、姉さんと殺りあったこと、ある？」

それには答えずに、昨日のことを思い出した。
首に番傘を突きつけられる感覚。
まるで、刀を突きつけられているようなあの感覚は、今でも覚えている。
神威はさらに続けた。

「俺はまだないんだ。……けど、たぶん姉さんは強いよ。俺といい勝負になるかもしれない。お前なんかじゃ足元にも及ばないだろうね。……そんなお前が、俺と戦うって言うのかい？」

神威が振り向くと、青い目と視線がぶつかった。
先ほどまで笑っていた目はどこに言ったのか、今は冷たい、不気味な目しかない。
私はそれに威圧されて、一言も発することができなかった。
神威はまた振り返り、一言だけ言った。

「……じゃ、姉さんによろしく言っといてね」

そう言って、一瞬で私の前から姿を消した。
私は呆然とその場に立ち尽くす。
そこには私だけ……否、私と気を失った男二人、それから首をなくした男が一人。
返り血を浴びた自分を見て、これじゃあ私が殺したみたいじゃないか、と自嘲した。
先ほどの神威の言葉を思い出す。
『姉さんによろしく――――』
姉さんに？
神那姉だけしか、眼中にないと言うのだろうか。
…そう、私は……弱い。
神那姉の、足元にも及ばないくらい。

私は地面に膝をついた。
目の奥が、じわりと熱くなる。
泣くもんか、そう思えば思うほどに、それは溢れてくる。
すると、すぐ近くで私を呼ぶ声がした。
そのすぐ後に、新八の姿が目に入った。
新八は血だらけの私と、倒れている三人を見て、一瞬だけ動きを止めた。
そして、新八は銀ちゃんと神那姉を呼ぶ。
すぐに駆けつけた銀ちゃんと神那姉。
私を見ながら、銀ちゃんは口を開いた。

「…神楽、お前……！」

……ほらね。
みんな私がこれをやったって思ってるんでしょ？
みんな、私を信じてくれないんだよ、きっと。
すると、神那姉が私に歩み寄ってきた。

「……来るなヨ」

私の言葉を無視し、神那姉はなおも近づいてくる。
私は後ろに後ずさったが、とうとう神那姉は私の目の前に立った。
ゆっくりと手が延びてくる。
思わず、目をつぶってしまった。
すると、抱きしめられる感覚。
目を開けると、神那姉が私を抱きしめていた。

「ッ…何するアルカ！離せヨ！今さら姉貴面してんじゃ「あなたが殺したんじゃないんでしょう？」

「……！！！」

「わかってる。私たちはわかってるから、神楽」

「……そーだぜ神楽ァ。そこに転がってる二人は知らねーが、お前は人は殺さない」

「ええ。……それが、僕たちが知ってる神楽ちゃんだよ」

なんで、そんなことが言いきれるの？
新八は見てるはずなのに。
私が我を忘れて、阿伏兎（あぶと）を殺そうとしたのを。
なぜだがわからない私の気持ちを察したのか、神那姉は言った。

「神楽…私は、私たちは……家族でしょう？だったら、そんなことくらいわかって当然よ」

その言葉を聞いて、こらえていた涙がまた溢れた。
紛れもない、この人は、私のお姉ちゃん――！

「神那姉……！！！」

私は神那姉の腕の中で泣いた。
銀ちゃんと新八も近くに寄ってきて、頭を撫でてくれた。
―暖かい――――
神那姉はなんだか、マミーと同じ匂いがする気がした。
親子だから当たり前か、なんて思いながら、私は声が枯れるまで泣き続けた。

人を見た目で判断するなってよく言うけどやっぱり危なそうな奴には近づいちゃ

久々の１日二話更新でした。
だって今日、台風のせいで暇でしたからｏｒｚ

次回から神楽と神那が仲良し姉妹になりますね。
微笑ましいです（＊＾ω＾＊）笑

それでは、次回もお楽しみに！

家族は似るって言うよね

「…あーあー、そんなに口の周り汚して。もっとゆっくり食べなさい、なくならないから」

「だめだヨ神那姉。こいつらに隙を見せたら全部持ってかれるネ」

「そう？私たち夜兎と違って、地球人は少食じゃないの？」

「こいつらは例外ネ」

「そうなの？」

「そうヨ」

そう言いながら楽しそうに会話をする女二人を見て、俺と新八は冷ややかな視線を向けていた。

その合間にも、箸を動かす手は止めない俺。

……神楽の言う通り、俺って『例外』なんじゃね？

そう思いながら朝食をとっていると、隣に座っていた新八があきれたように言った。

「……なんか、すっかり仲のいい姉妹になっちゃいましたね。神楽ちゃん、昨日までは一方的に嫌ってたのに」

「まったくだ。…ったく、面倒臭い一家だなコノヤロー」
そう言うと、今まで白米を頬張っていた神楽がそれを飲み込んだかと思うと、にっこりと言った。
「なんか言ったアルカ？」
「「……いえ、何も」」
二人してそう返す。
……いやいやいや、冗談じゃねーよ？
俺って一応、万事屋のオーナーなんですけど。
これ、立場逆転されてんじゃねーか！！！
しかもなに神楽（コイツ）！？
この1日で、もう姉貴に似てきたって言うのか！？
そのにっこり笑顔とかそっくり！
ていうかもう本人みたい！
ほんと勘弁してくれ！
そう頭の中でゴタゴタ考えていると、神楽がそういえば、と口を開いた。
「まだ昨日のこと、詳しく話してなかったネ」
ピタリ、と会話が止む。
昨日のこととはそう、神楽の周りに三人の男が倒れていた、あれ。
そのうちの一人は首が飛んでいて、死んでいた。
神楽は神那に抱き締められたあの後はずっと泣いていて、泣き止んだと思ったら、今度は泣き疲れたのか眠ってしまったのだ。
そうして朝を迎え、今に至る。

自分たちから聞くのではなく、神楽が話してくれるのを待とうということになったが、まさかこんなに早く話してくれるとは。
神楽は、ぽつりと言った。

「……私、神威に会ったアル」

「「「！！！！！」」」

新八も神那も、驚いて声が出ないようだった。
神楽の様子から見てそうだろうなとは思っていた俺は、神楽に質問する。

「……あいつ、何しに来てたのかわかるか？」

「…うーんと……『姉さんによろしく』とは言ってたケド……」

その瞬間、神那はガタッと席を立ち上がった。
いきなりの出来事に動揺した神楽が神那を見上げる。

「……ど、どうかしたアルカ？神那姉」

その問いには答えずに、神那は言った。

「神威は……他にも、何か言ってたの？」

「……え？えっと……『やっぱり地球に来てたんだ』とか、『仕事やめちゃったんだ』……とか？」

それを聞き、ソファーにボスッと座る神那。
小さく、そう、と呟く。

心配そうに神那の顔を覗き込んでいた神楽だったが、やがてこの場の雰囲気を明るくさせるように言った。

「……にしても、むかつく野郎アル！今度会ったときは、コテンパンにしてやるネ！」

そう意気込んでいる神楽。
そのせいで、気づかなかったのだろう。
神那が小さく、『…やっぱりそうなってしまったのね』、と呟いていたことを。
それを聞いて確信した。
こいつは、俺たちに何かを隠しているということを。

＊＊＊

夜になり、新八は家に帰った。
そして、神楽が寝たのを確認したその後。
俺は神那に話があると伝えた。
神那は、まるで俺がそう言うとわかっていたかのように、快く了承してくれた。

「……話って、何かしら？」

「神那……お前、俺たちに何か隠してることあるんじゃねーの？」

「……どういうこと？」

あくまでしらを切る神那に、俺は自分の考えをぶつけた。

「……俺が気になってんのは依頼内容なんだよね。お前はうちに泊

まりに来たこととは別に、何か目的があるんじゃねーの？」

「……具体的には？」

「そうだな……その『やめさせられた』っつー仕事でなんかをやらかして、ここに助けを求めに来たとか？」

俺がそう言うと、神那は軽く微笑んだ。
そして、さすがね、と言う。

「…でも、少し違うわ。私は仕事で何か失敗を犯したわけじゃないの。……その仕事を、やめてきたのよ」

「……やめた？なんで」

「話すと、長くなるわ。……お茶入れるから、待ってて」

そう言って、キッチンに姿を消す神那。
その後ろ姿を見つめながら、俺は思った。
この女はその小さな背中に、何か重い荷を抱えているのだなと。

仕事場の上司には気をつけろ

――まずは、私が以前働いていた仕事の話をするわね。
私の仕事は、秘密裏に春雨を調査し、春雨が企てている計画を未然に防ぐこと。
その組織……私の口から詳しくは言えないけど、組織の中にはいくつかチームがあってね。
私が所属していたチームは、主に潜入捜査をやっていたの。
危険が伴う仕事よ。
でも、苦痛に感じたことはなかった。
私たちの行動で、春雨のせいで苦しんでいる人を助けられると思えば。
……でもある日、私は弟が春雨の第七師団団長になっていることを知ったの。
それを知った私は、春雨に潜入したわ。
もちろん、これは私情。
私情を挟むことは掟に反していたけれど、私にとってはそんなことどうでもよかった。
ずっと会っていなかった弟に会いたかった。
今どこにいるのかまったくわからなかった弟と妹のうち、一人の居場所を突き止めたんだから。
……でも、その日は神威はいないみたいだった。
諦めて帰ろうとしたとき、私は初めて自分が春雨の連中に囲まれていることを知ったわ。
よほど動揺していたんでしょうね、私はまったくそのことに気づか

なかった。
なんとか逃げきることはできたんだけど、傷を負った私は、今いる場所がどこかもわからずに、フラフラとさ迷ったわ。
そこで倒れて、気を失った。
次に目を覚ましたのは、暖かい布団の中。
私の顔を覗き込んでいた小さな女の子は、私と目が合うと、お母さんを呼びにいった。
どうやら私を助けてくれたらしくて、あれこれと世話をしてくれたわ。
しばらくの間その家族と一緒に過ごして、私は思い始めたの。
……また、家族みんなで一緒に暮らしたいなあ、って。
勝手なのはわかってるの。
自分から家族を捨てたくせに何を今さら、って。
でも、その思いは止まらないの。
考えれば考えるほど、胸が苦しくなったわ。
気づいたら、私はその家を飛び出してた。
そして、一生懸命父さんや神楽の情報を探したわ。
……私はそれで知ったの。
神楽がここにいるって。

＊＊＊

「……あなたの言う通りよ、銀さん。私はただ泊めてもらうことが目的じゃない。もう一度家族で暮らしたかった。そのために、ただ神楽に会いに来ただけ。……嘘をついててごめんなさい」
そう言うと、銀さんは頭をボリボリと掻いた。
そして、ため息混じりに言った。
「そこは別にいいけどよ……その仕事、正式にやめたわけじゃない

のに、連絡とかしなくていいのかよ？心配してんじゃねーの？」

「それはないわ。…私たちには掟があってね。一度組織を抜けようものなら、死ぬまで追われることになるわ。……だから今、私は命を狙われてる。組織からも、春雨からも」

「……」

「春雨は、私たち組織の居場所を特殊な電波で探しだそうとしていたの。…それを知った私たち組織のトップは、急いでそれに対抗できるものを作らせた。……それがこれよ」

そう言って、服に着いていたバッジを見せる。

銀さんはただのバッジにしか見えない、と目を丸くする。

私はゆっくりと説明した。

「このバッジには、春雨が流している電波を遮断する機能が備わっているの。…神威が私に感ずいて地球（ここ）に来たことを考えると……組織の連中、私を本気で裏切り者と見なしたってわけね」

「……つまり、お前が持ってるそのバッジの機能だけを停止させた、ってわけか？」

「そうなるわね」

意味をなさなくなったそのバッジを外すと、ゴミ箱に投げ捨てた。

すると、銀さんは死んだ魚みたいな目で私を見ながら言った。

「……依頼内容、変更するか？」

「……は？」

言っている意味がわからない。
何を言ってるんだ、この人。

「いや、だから依頼内容嘘ついてたんだろ？だったら変えりゃあいいじゃねーか。『家族全員との仲直りに協力してくれ』って」

「…銀さん。あなた、言ってる意味わかってるの？春雨だけじゃなく、私がいた組織とも戦うことになるかもしれないのよ？もしかしたら死ぬかも「そんなの、関係ねーんじゃねェの？」

「……アンタ、前に神楽に言ったよな？『私たちは家族だ』って。家族が困ってんだ、手を差しのべねー奴がどこにいるよ？」

その言葉に、私は戸惑ってしまった。
巻き込むわけにはいかない、そう思ってはいても、すがってしまいそうになってしまう。
…でもやはり、神楽を……この人たちを、危険に巻き込むわけにはいかない。
この人たちは、神楽の大事な『家族』だから。

「…銀さん、その気持ちは嬉しいけど……やっぱり私「あー！もうっせェ！俺はもう依頼引き受けたの！黙って引き受けられろボケ！ちなみに報酬もちゃんとな！」

「なっ……なに勝手に決めてんのよ！？余計なことしないで！」

私がああだこうだ言っても、銀さんは聞こうとしない。
そのうち、私が折れた。

「…わかったわよ……依頼内容、変更するわ」

「はいよ。……とりあえず、お前は今まで通りここに泊まりな。奴らに見つかったら見つかったで、俺たちが守ってやるよ。面倒臭ェけど」

最後の面倒臭い発言は気にくわなかったが、そこはスルーした。
それ以外に一つだけ、引っかかった言葉があった。
それは、『俺たち』という何気ない言葉。
三人で様々な仕事をしてきたこの人たちだからこその言葉だから、そう言うのは当然。
しかし、それは必然的に、神楽も巻き込むことになるのは明白であった。

「銀さん……神楽にはこのこと、知らせないでほしいの」

「なんでだよ？」

「…神楽はみんなに置いていかれて、ひとりぼっちだったはずよ。……だから神楽にはもう、つらい想いはさせたくないの」

「……神楽は、そんなこと思ってねーと思うがなァ」

「……とにかく、お願い」

そう言うと、銀さんは少し考える仕草を見せた。
しばらくすると、銀さんはわかったと頷いた。
銀さんにありがとうと返して、寝室に向かった。
布団に入って一人になると、ああ、あの人たちを巻き込んでしまっ

たんだな、と自己嫌悪にも陥ってしまう。
……でも、私は捕まるわけにはいかない。
神楽のためにも、家族でもう一度暮らせるようになるまでは。
そのためなら、別に死んだって構わない。
それが私が犯した罪への、『償い』だから。

喧嘩するほど仲がいい……かもしれない（前書き）

ここから日常編になります。
シリアスではなくコメディーで！
それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

喧嘩するほど仲がいい……かもしれない

朝。
昨日の夜はいろんなことを話しすぎて、普通に接してくれないんじゃないかと心配だったけれど。
銀さんは案外、そういうことを気にしないタイプのようだ。
何より、『普通に』というのが今の私には一番嬉しい。
銀さんの気遣いに感謝しつつ、みんなで朝食をとった。

＊＊＊

現在、午後1時すぎ。
最も太陽が上がっている時間帯。
私と神楽は、いつもの公園へと向かっていた。
私たち夜兎は、太陽の下を散歩することなどほとんどないのに、まったくこの妹は、楽しそうに私と手を繋ぎながら歩いている。
けれどさすがに、真夏のこの時間帯はきつい。
何か冷たいものがないと、このままでは死んでしまう。
……と、ちょうどいいところに、アイスクリームを売っている人がいた。
それを見た私は神楽に言う。
「ねえ神楽。お姉ちゃん、アイスクリーム買ってくるから、あそこのベンチに座っててくれる？」

神楽はまじでか、と目をキラキラさせながら言うと、元気よく返事をして、ベンチに走っていった。
それを見届けてから、私は列の最後尾に並ぶ。
ようやく順番が回ってきて、何にしようかな、と迷う。
神楽ならイチゴとかモモとかそんなチャラついたのじゃなくて、バニラでいいって言うよね。
私は……抹茶にしようかな。
売り子に頼んで会計を済ませる。
両手にアイスクリームを持ちながら神楽が待つベンチに向かおうとすると、なにやら怒声が聞こえてきた。

「お前、サド！この公園のベンチは、このかぶき町の女王神楽様のものだって何回言ったらわかるアルカ！？」

「知るか、んなもん。このベンチは先に座った俺のもんでィ」

面倒臭そうにアイマスクをとりながら、欠伸を一つかく少年。
栗色の髪をしたその少年は、意外と美形。
依然として言い争いを続けている二人は、なんだか痴話喧嘩をしているようにも見えた。
アイスクリームを持ちながら近づくと、先に栗色の髪をした少年が私に気づいた。

「……アンタ、誰？」

「神那姉！！！…あ、アイス買ってきてくれたアルカ！」

神楽にアイスクリームを手渡してから、少年に顔を向けた。

「初めまして、神楽の姉の神那です。ええと……」

「あ、俺ァ沖田総悟って言いまさァ、よろしく。……て、え？チャイナの？」

「そう、姉よ」

総悟くんは、へェ……と言いながら私を見る。
そして、鼻で笑いながら言った。

「チャイナの姉貴、ねェ……。どーせチャイナに似て、ロクでもねーんだろィ？」

その瞬間、ぷちんと何かが切れる音がした。
神楽が神那姉、と不安そうに呟いていたが、聞こえていなかった。
地を蹴って一瞬で総悟くんに近づく。
私の殺気を感じ取ったのか、刀に手を置いていた。
なかなかやるじゃない、と少し感心した。
……が、私の方が上手（うわて）だったらしい。
頭上にさしていた番傘をたたみ、突きつけた。

「…総悟くん？神楽の遊び相手になってくれてるのは感謝するけど……神楽を馬鹿にすることは、この私が許さないわよ？」

「…へっ……アンタ、俺と一緒にSの道を極めませんかィ？その資質がありまさァ」

「お誘いどうもありがとう。だけど遠慮しとくわ」

「そうですかィ。残念でさァ」

互いに黒い笑みで笑う。
隣で神楽が神那姉……と少しあきれているようだった。
番傘を離すと、総悟くんも刀から手を離した。

「…あー、おっかねェ。チャイナァ、お前の姉ちゃん強ぇな」

「当たり前ネ！怒ると頭に角が百本生えるのヨ！」

「神楽、それどーゆう意味？」

「…な、なんでもないアル……」

にっこりと言うと、神楽は冷や汗を流していた。
そんなに私って怖いのかな、そう思いながら総悟くんの方に顔を向けた。

「……ところで総悟くん、あなたって「おい総悟！てめェまたサボってんのか！？」

「……げ、土方」

瞳孔を開きながらやってきたその人物は、総悟くんと言い合いを始める。
総悟くんは最初呼び捨てで呼んでいたけど、どうやら彼は総悟くんの上司のようだった。
私と神楽がずっと見つめていたものだから、その視線に気づいたのか、私を見ながら言った。

「……アンタ誰だ？見かけねェ顔だが」

「私は神楽の姉の神那。あなたは？」

「…チャイナに姉貴がいたとは初耳だな……。俺は土方十四郎、このバカの上司だ」

そう言いながら十四郎さんは総悟くんを指差す。

「そうなの。お互い大変ね、おてんばなのがいると」

「まったくだ」

「ちょ、神那の姉御！それ、どーゆう意味ですかィ！？」

いつの間にか『姉御』呼びになっていることに苦笑する。

やっぱり私、怖い人みたい。

私は総悟くんの目の前に立ちながら言った。

「そーゆう意味よ。……ところで総悟くん？」

「……なんですかィ？」

「神楽とあなたを見てて思ったんだけど……あなた、もしかして神楽の彼氏？」

「違いまさァ！」「違うアル！」

「……あら、そうなの？」

二人同時に否定されて、仲がいいなあなんて思ったのは内緒の話。

似ている二人は気が合う（前書き）

今回はあの人（？）が出てきます。
私も意外に好きなあの人です（笑）

それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

似ている二人は気が合う

―ピンポーン――――
インターホンが鳴った。
こんな朝早くから誰だよ、と思いながら、神楽出ろよと言うと、『嫌だ』の一言。
その返事にイラッとしながら神那にも同じことを言うと、台所で洗い物をしていた神那は『今忙しいんだから銀さん出なさい！』と怒号が返ってきた。
しぶしぶ立ち上がり、玄関に向かう。
先ほどから何度もインターホンを鳴らしている訪問者に『今出ますって！』と一言いってから戸に手をかけて開けようとすると、それより早くスパーンと戸が開いた。
やべ、昨日の夜から鍵しめてなかったのか、と思いながら訪問者が誰なのか確認する。
……なんだ、死にかけのババアかよ。

「…銀時……あんた、口に出てるよ」

「……あれ、まじでか」

どうやら最後の『死にかけのババア』発言だけ口に出てしまっていたらしい。
今度から気をつけねば。

……そう、訪問者はここ万事屋の大家、お登勢のババアだ。
こんな朝っぱらから何の用だよ、そう言おうとして、はた、と止まった。
俺の視線は、ババアの左手へ。
ババア、アンタが持っているのはまさか……！
ババアは俺の視線に気づき、ああ、と言ってから言った。

「回覧板だよ。次の人にまわしてやってくれ」

ババアは回覧板を手渡してくる。
が、俺はなかなかそれを受けとることができなかった。
……だって、わかってるだろ？
俺たちの次は誰なのか。
……え？誰かって？
そりゃあお前……隣のヘドロさんだよ！
あの恐ろしいヘドロさんだよ！

果てしなく行きたくないので、ババアに行ってもらおうと思った。
化け物同士、気が合うんじゃね？
それを伝えようと口を開こうとすると、ババアの手から回覧板が離れた。
驚いて見ると、神那が回覧板を眺めていた。

「お前、何してんだ神那！俺らがその回覧板をまわす相手わかってんのか！？ヘドロさんだぞ！？」

「……は？何言ってんの銀さん？そのヘドロって人がどんな人かは知らないけど、回覧板はまわさなくちゃいけないじゃない」

……そうだったァァァァ！！！

神那はまだヘドロに会ったことないから知らねーのか！
ヘドロの恐ろしさを！！！

「いやいや、待て神那。よく考えよう。ここは冷静に「……神那、って言うのかい？あんた」

ババアがそう言う。
そういえば、神那が来てから一度もババアと会ってないから、ババアはこいつのこと知らねーのか。
……とりあえず、神那にババアを紹介しとくか。

「神那、このババアは万事屋の大家のババアだ」

「あんたそれ、ババアとしか説明してないじゃないかい。……ったく、紹介もまともにできないのかい？あんたは」

「いや、それがすべてだろ？」

「んなわけあるか！…ったく……神那、つったね。あたしゃ、ここの大家のお登勢っていうもんだ。銀時（こいつ）は金なんざめったに払わないがね」

ババアがそう言うと、神那はペコッと頭を下げながら言った。

「あいさつが遅くなってすみません。ちょっと前からここに居候させてもらってる、神楽の姉の神那っていいます。以後よろしくお願いしますね、お登勢さん」

「…へェ……よくできた姉貴じゃないかい。それじゃ、回覧板頼んだよ」

「はい！」

そう言って、ババアは出ていく。

……あれ？

俺、なんか忘れてね？

……。

「あああああああ！！！」

思い出した。

回覧板、受けとっちゃだめじゃねーか！

ヘドロさんちに行かなくちゃいけねーじゃねーか！

…だめだ、俺ら死んだわ……。

俺の気持ちとは裏腹に、神那は鼻歌を歌いながら、神楽に『出かけるわよ』と声をかける。

回覧板を届けにヘドロさんちに行くと知らない神楽は、目を輝かせながら出てくる。

が、神那が持っている回覧板を見た瞬間、すべてを悟ったのだろう、動きが止まった。

神那はそれを不思議そうに見ると言った。

「どうしたの、神楽？一緒に回覧板届けに行くわよ。……ほら、銀さんも突っ立ってないで」

「……え？俺も行くの？」

「当たり前じゃない」

「いやあ……俺らは遠慮しとこっかな～。…な、神楽？」

「そ、そうアルナ。神那姉行ってきて「二人とも、行くわよね？」
「「……はい」」
従うしかないよね、コレ。
＊＊＊
ああ……ついに来てしまった。
現在、俺たちはヘドロの森の斜め前の看板に隠れてます。
（おい神楽、どーするよ？この前みたいに『ちゃーん』計画で行くか？）
（そうアルナ……それが一番いいと思うネ）
（よし、じゃあ決定だ。神那は回覧板渡す係な、今日は新八いねーから）
「なにその計画？……てゆーかあなたたち、なんでそんなにコソコソしてるの？たかが回覧板じゃない」
（声が大きい！それにお前、あれを見て恐ろしいとは思わないのかよ！！！）
あれ、とはもちろんヘドロの事。
ヘドロをじっと見てから、神那は言った。
「……別に？頭からお花が生えてるなんて、かわいいじゃない」

（そういう問題じゃないアル！とにかくヘドロは危険なのヨ！）

「……もう、面倒臭いわね。いいわ、私が行ってくるから。あなたたちはここで待ってて」

（あ！ちょっと、神那姉！）

神楽の制止も聞かず、神那はすたすたとヘドロに向かって歩いていく。

近づいてくる神那に気づいたのか、ヘドロはいつもの恐ろしい形相で神那を見る（当の本人はそんなつもりはないのだろうけれど）

それに怯むことなく、神那はどんどん近づいていった。

そしてとうとうヘドロの目の前に立ち、回覧板を手渡した。

早く帰ってこい！そう心の中で叫んだが、なかなか戻ってこない。

どうやら何か話しているようだ。

何を話しているのかは、よく聞き取れない。

しばらくして会話を終え、神那が戻ってきた。

神那は楽しそうに言った。

「銀さんも神楽も、ヘドロさんの何がいけないって言うの？すごくいい人じゃない」

俺と神楽は、顔を見合わせる。

「…えっと、神那？……お前、ヘドロとなに話してきたの？」

「何って、ただの世間話よ？……ああ、それから今度お茶する約束したわ。いい喫茶店知ってるんですって」

そう言って鼻歌を歌いながら歩き出す神那。
その背中をしばらく呆然と見つめて、俺たちも後に続いた。
……たぶん、このとき俺と神楽は、同じことを考えていただろう。
やっぱり化け物同士は、気が合うのだと。

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（上）（前書き）

暑いですね（´Д`）、
こんな中、クーラーもなしに授業をさせる学校はふざけてると思います。
……そう、私が通う学校は、まだ終業式ではないんです。
なのに、宿題は多いという。
ふざけてますよね（´；ω；`）！

というわけで、夏休みネタ。
私はまだ夏休みじゃないんですがね↑しつこい
それではどーぞ（^Ｏ^）！

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（上）

よい子のみんなは夏休み。
一年中休みと言ってもいい万事屋も、まとまった収入が入ったので夏休みということで。

「キャッホオオオイ！！！」

私たちは海に来ていた。
バッシャーン！と音をたてながら海に飛び込む神楽。
手にはいつもの番傘はなく、頭の上には代わりに笠を被っていて、外れないように糸で巻きつけてあった。
そう、つまりは日光対策。
……ほんとにこの子は馬鹿。
地球で長いこと生活している神楽は太陽になれてるからいいかもしれないけど、私は別。
海に入ることはせず、いつもの番傘を手に神楽を見つめる。
……正直、海には一度も入ったことがないから、入ってみたい。
でも、今は我慢。
そのうち、入れるようになるかもしれないからね。
そう思っていると、遠くで私を呼ぶ声がした。
見ると、かなり沖合で手を振っている神楽と新八くん。
二人に手を振り返すと、後方にある『海の家』を見た。
そこでは銀さんが焼きそばを作っている。
休みだというのになぜ働いているのかと聞くと、『パチンコ代稼い

どこうと思って』とくだらない理由だった。
まあ、銀さんらしいけど。
私は他の店員さんにかき氷を一つ頼んだ。
ほどなくして運ばれてきたかき氷を口に運ぶと、頭の中がキーンと冷えるのを感じた。
かき氷を食べ終えて、しばらく神楽たちが楽しそうに泳いでいるのを見ていたが、やがて睡魔が襲ってきた。
欠伸を一つかくと、知らぬ間に、眠りに落ちていた。

＊＊＊

「……おい神那、起きろ。日も暮れてきたし、旅館行くぞ」

「……ふへぇ？」

「ぷっ、何寝ぼけてるアルカ、神那姉」

「ほんとですよ。早く行きましょう」

「わん！！！」

……ああ、そっか。
私、寝ちゃってたんだ。
ええと……今日は海に来てて、お泊まりするんだっけ？
……てゆーか、泊まれるほどお金あるんだっけ？

「……ねえ銀さん？泊まるって、そんなお金あるの？」

「あ？……ばっか、お前そんなの決まってんじゃん。格安のところ見つけたんだよ」

「格安って……どんな旅館かわかってるの？そこ」
「いんや？場所しかわかんねー」
「…もう……」
そーゆうのって、なんか危ない気がするような……。
…まあ、気のせいよね。
そう思いながら、先頭を歩く銀さんについていく。
海から離れだいぶ森の奥まで来たが、建物らしきものは見当たらない。
本当にこんなところに、旅館なんてあるんだろうか。
「…おっかしーな、ここらへんだと思うんだが……」
銀さんはそう言いながらどんどん歩いていく。
そして、一軒の建物の前を素通りした。
その建物を見て、私は思った。
……あった、旅館。
その旅館は、いかにも幽霊とかそういう類いが出そうな建物で。
すると、神楽が言った。
「銀ちゃん、旅館ってこれじゃないアルカ？」
「は？なに言ってんの神楽ちゃん、これのどこが旅館だよ？みため的に」
「でも銀さん、そこにほら、旅館って書いてありますよ？所々読めないけど」

新八くんのその発言に返す言葉がないのか、銀さんは黙り込んでしまった。
真っ青な顔をしている銀さんを見て、私は察した。
「……もしかして、銀さんって幽霊だめなの？」
キョトン、とする銀さん。
少しの沈黙があって、銀さんは手をぶんぶんと振りながら言った。
「いやいやいやいや、君も何を言っているんだね神那くん？そんなわけないじゃないか」
「そう？……てゆーか銀さん、顔真っ青だけど大丈夫？」
「……これはアレだよ。海で泳ぎすぎて唇が紫になる的なノリで顔が青くなっちゃったんだね、きっと」
「……いや、銀さん、意味わかりませんから。第一、銀さん泳いでなかったじゃないですか」
「いいんだよ！とりあえず怖いとかそんなこと思ってねーってことだよ俺は！」
―ガサッ―――
「「……」」
草むらから何かの影が。
沈黙を破ったのは、もちろん銀さんだった。

「ギャアアアア！出たァァァァァァァァ！！！」

そう言いながら、少し離れた木の影に隠れる銀さん。

……まったく、幽霊とかそんなのいるわけないじゃない。

だいたい、こーゆうのは動物ってオチよ。

そう思いながら、音のした方を見る。

すると、草むらからひそひそと声が聞こえてきた。

（おい、向こうから声がしたぞ？……や、やっぱりここ、出るんじゃねーか？）

（出るって何がですかィ？……あり？どうしたんでさァ、顔が真っ青ですぜィ？）

（なっ……んなわけあるか！）

（じゃ、見てきてくだせェ）

（は？…いやいや、嫌だね、面倒臭ェし。……別に怖いとかそーゆうの関係ないけどね、うん）

そんな言い合いが聞こえてきた。

……というか、あれ？

この声、聞いたことがあるようなないような……？

ガサッ、と音をたてながら草むらから出てきたのは、最近知り合った二人。

十四郎さんと、総悟くんだった。

「「……」」

「「……あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」」

同時に叫んだ私たち一行と、真選組一行であった。

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（上）（後書き）

（上）ときましたので、この話はこのまま（中）→（下）と続きます。

……3話にわける必要はあったんだろうかｏｒｚ

感想待ってます！切実に！

それでは、次回をお楽しみに！

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（中）（前書き）

たくさんの方が読んでくれていて嬉しいです！
感想もお願いします（＊＾ω＾＊）！

それではどーぞ（＾Ｏ＾）

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（中）

「土方さんに沖田さん！何してるんですか、こんなところで」

……なに？多串くん？

あり？じゃあ今のは幽霊じゃなくて……ただの多串くんと総一郎くん？

……。

「ふっざけんなよォォォォ！？俺めっちゃかっこ悪ィじゃん！」

木の影から抜け、奴らのいる方へと向かう。

俺に気づいた多串くんがこちらを見る。

露骨に嫌そうな顔をしてきたもんだから、し返してやった。

「おいおい、警察が揃いも揃って何してやがんだ、こんなとこで？

サボりですかコノヤロー」

「サボりじゃねェよ。ちゃんとした有給休暇だ。……ま、俺たちも夏休みってことだな」

「そうでさァ。土方さんが『格安の旅館見つけた』って言ったのが始まりで、わざわざ休暇とって泊まりに来たらこんな幽霊屋敷みてーなとこだったでわけでさァ」

「ふざけんじゃねーヨ、税金泥棒が！私たちが納めてる税金をなんだと思ってるアルカ！！！」

そうして言い争いを始める俺と多串くん、神楽と総一郎くん。
その様子をあきれたように見る新八に神那、真選組の連中。
『この二人も似てるわね』という神那の呟きが聞こえた気もしたが無視した。
そして、なかなか治まらない言い争いにしびれを切らしたのか、神那が言った。

「……ああもう、あなたたち黙りなさい！」

辺りはシン、と静まり返る。
神那は続けた。

「そんなに相手が気にくわないなら、どっちが正しいのか戦って決めなさい。まどろっこしいことなしで、勝った方が正しいってことよ。簡単でしょ？」

「そりゃあ名案だ。……よし、乗った！」

俺が木刀を腰から抜きながら言うと、多串くんも刀を鞘から抜いて『上等だ！』と言った。
お互いにらみ合い、いざ相手に飛びかかろうとしたそのとき。
神那に『ストーップ！』と止められた。

「ちょっと！戦って決めろとは言ったけど、刀を使えなんて言ってないでしょ？」

「は？……おい神那、じゃあ何で勝負すんだよ？」

そう言うと、神那はフフフ、と笑いながら言った。

「そんなの決まってるじゃない。そこに、いい感じに幽霊の出そうな旅館があるのよ？……肝だめしよ。今は夏だし、涼しくなっていいと思うわ」

「それは名案ネ！幽霊って殴れるのか一回試してみたかったアル、私！！！」

「神楽ちゃん、それ幽霊の人がかわいそうだから。まあ、触れないと思うけど。……でも神那さん、僕もそれに賛成です」

「そうよね！……あり？どうしたの、銀さんに十四郎さん。顔が真っ青よ？……まさか、怖いって言うんじゃあ？」

「違うから！なあ多串くん！？」

「誰が多串くんだ！…ゴホン……ま、俺は別に構わないがな」

何言ってんだこいつぅぅぅ！？

そこは否定しろよ！

行きたくないって言えよ！

俺は行きたくねーんだよコノヤロー！！！でも怖がってるって思われたくないし、行くしかねーんだよコノヤロー！！！

神那は俺たちの返事ににっこりと微笑むと、言った。

「…じゃ、まずは万事屋チームと真選組チーム、代表者を二人ずつ決めてちょうだい」

「よし。……おい新八ィ、銀さん優しいから、あんまり出番のないお前に譲ってやるよ」

…食いついてこい、新八！
お願い、三百円あげるから！
だが、俺のその願いは届かなかったようだ。

「何言ってるんですか、銀さん。銀さんがこの勝負引き受けたんだから、銀さんが出るに決まってるでしょ。……神楽ちゃんも幽霊に会いたいみたいですし、僕はいいですよ」

「はあ！？お前、何言っちゃってんの！？俺ァ「よし、決定アル！神那姉、万事屋チームは私と銀ちゃんが出るネ！……て、あれ？神那姉は？」

「おいお前ら！人の話「ここにいるわよ、神楽。……どうやら、真選組チームも十四郎さんと総悟くんに決まったようね」

「…だからお前ら……人の話を聞けェェェェェェ！！！」

俺が叫ぶと、神那は面倒臭そうに『なに？』と言った。
そして続けざまに『怖いの？』とも言った。
だからさァ……そう言われると、やるしかないんだけど。
なんでもないですと言うと、神那は『そう？』と首をかしげながら言った。

「……私、今あなたたちが代表者を決めてるとき、旅館の方に許可をもらってたの。肝だめしに使わせてくださいって。そしたら、快く許可してくれたわ。『何が起こっても責任は取れないけど』とは言ってたけど」

……は？
何が起こってもって、いったい何が起こるわけ？
まじで幽霊とか？
いやいや、大丈夫だよね。

「……それじゃ、ルールを説明するわ。この旅館は４階建て。その最上階である４階のどこかの部屋に、一本の蝋燭を置いといたの。その蝋燭を持って帰ってきた方が勝ちよ」

「なんだ、簡単じゃねーか」

「……ただし、その蝋燭には火がついてるわ。その火が消えたり、蝋燭がなくなってしまった場合は引き分け。罰として、チームの代表者一名には外で野宿をしてもらいます。……あ、その代表者は銀さんと十四郎さんで決定済みよ」

「なんでそこ決定！？ふざけんなよお前！なんか楽しんでるだろお前！！！」

「もう火がついてるってことは、急いで行かなきゃいけないアル！行くアルヨ、銀ちゃん！」

「ちょ、待て神楽！まだ心の準備ができてな「はい、それじゃあスタート～」

俺にとって、恐怖の一夜が始まった。

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』　（下）

「……やっと行きましたね、あの人たち」

「そうねえ。銀さんと十四郎さんに至っては、最後まで抵抗してたけど。……まあ、あの二人見てると面白いけどね」

……確かにあの二人の怖がり方は面白い。
でも、少し怖がりすぎな気もするけど。
大の大人が情けない。
少しは神楽ちゃんを見習ってほしいものだ。
そう思っていると、今の今まで影が薄かった近藤さんが声をかけてきた。

「君が神那さんか。トシから話は聞いてるよ、あのチャイナ娘の姉貴なんだって？」

「そうです。あなたは……十四郎さんたちの上司か何かですか？」

「いかにも。俺は近藤勲、こう見えても真選組の局長をやってる」

「まあ、そうなんですか」

それから他愛のない世間話が始まった。
あまり会話に入れない僕や山崎さん、真選組の皆は、ただその幽霊

旅館を見つめていた。
……あの人たち、無事に帰ってこられるんだろうか？

＊＊＊

「……とととと、とりあえず神楽ちゃ～ん？俺を気絶させて４階まで運んでくれるかい？」

「いやアル、面倒臭いし」

「じゃあアレだ！４階まで猛ダッシュだ！急ぐぞ！！！」

「いやアル、１階から全部見てまわりたいネ」

「駄々をこねちゃいけません！…第一お前、ルール忘れたのか！？こうしてる間にも、蝋燭はどんどん短くなってんだぞ！？」

俺がそう言うと、神楽はしばらく考える素振りを見せた。
そして、仕方なさそうに言った。

「……そうアルナ。じゃあ銀ちゃん、私に掴まるヨロシ」

言われた通り神楽に掴まると、俺は後ろを振り返りながら真選組の連中に言った。

「じゃ、俺ら先に行くわ。こいつの馬力についてこれるかな？」

そう言うと同時に、神楽は『ぬぉぉぉぉぉぉ！！！』と言いながら階段を駆けていく。
後ろから『待てコラ！』という声がしばらく聞こえていたが、やが

て聞こえなくなった。
そして、俺たちは一気に４階へ。
神楽から手を離すと、俺は辺りを見回した。
真っ暗で何も見えない。
懐から懐中電灯を取り出して、カチッとボタンを押した。

「……」

……あり？
なんかいるんですけど。
そこの壁になんかくっついてるんですけど。
……足がないんですけど。
もしかして幽霊？
いやいや、そんなわけないよね、大丈夫だよね。
そう思っていると、神楽が俺の服の裾を引っ張りながら言った。

「……ねえ銀ちゃん、今なんか言ったアルカ？」

「……は？……いやいや、なんも言ってねーけど」

「まじでカ。……うん、たぶん聞き間違いアル」

「……そうだよ、たぶん」

「……それじゃあ銀ちゃん、お楽しみの探索といくアル！私はこっちから回るから、銀ちゃんはそっちをお願いネ！」

「あっ！ちょ、待っ……！」

言い終わる前に、ぴゅ～っとどこかに行ってしまった。

遠くから、『幽霊出てこいや！』と何やら勇ましい声が聞こえる。
……うん、これはまずい。
一人で蝋燭探せって？
一人で得体の知れない部屋の扉を開けろって？
無理無理無理無理！
絶対無理だから！！！
そう思ってる間にも、後ろに気配を感じる。
振り返るべきなのか、コレ？
悩んだ末、勇気を出して振り返ってみた。
後ろに立っていたのは、もちろん幽霊の彼ら。

「ギャアアアアア！！！」

一目散にその場から逃げ、ある一室に逃げ込んだ。
中に入ってから、やらかした、そう思った。
つい我を忘れて、何があるのかまったくわからない部屋に入ってしまった。
ここに、何かいたらどうする？
怖がっていても仕方ない、と恐る恐る顔を上げた。
そこにはぼうっ、と明かりがついており、思わず叫び声をあげそうになったが、神那が言っていたルールを思い出した。
『火のついた蝋燭が――――』
……まさか！
あの光はまさか！！！
ゆっくりと、その光に近づく。
その光は案の定、俺が求めていたものだった。
――蝋燭キタ――――――！！！

＊＊＊

「おい神楽、蝋燭見つけたから！とっとと帰るぞ！」
神楽を呼んだが、返事は返ってこない。
何やってんだあいつ、そう思っていると、ドタドタと忙しなくこちらに向かってくる音が聞こえた。
ようやく来たのか、と思ったが、現れたのは別の人物だった。
「やっと追いついたぞ、万事屋ァ……チャイナに頼るなんざ、汚ェマネしやがって」
「汚くねーし！これもチームワークだチームワーク！…へっ、それに蝋燭は俺がいただいた。この勝負、俺ら万事屋チームの勝ちだ」
そう言うと、マヨラーはくくくっと不気味に笑った。
何がおかしい、そう問うと、答えが返ってきた。
「あの女は『蝋燭を持ち帰った方の勝ち』と言っていた。…つまり……戦って奪ってもいいってこった！！！」
マヨラーは一瞬で刀を抜き、俺を斬ろうとする。
俺は蝋燭の火を消さないように、間一髪でよけた。
「何しやがんだコノヤロー！危ねーじゃねェか！」
「んなもん関係ねェ！！！」
そう言いながらなおも刀を俺に向け続けるマヨラー。
蝋燭の火を守ることに集中していたのだが……視界に、彼らが入った。
そう、幽霊さんたち。

そして我に返ったときには、刀が目前に迫っていた。
斬られないためには、蝋燭を手放すしかなく。
ぱっと離した蝋燭は、地面に落下していく。
……マヨラーの一撃をよけてからすぐ、蝋燭を拾うつもりだった。
しかし、マヨラーの刀が斬ったのは、なぜか蝋燭。
真っ二つになった蝋燭は、まるでスローモーションを見ているかのように落下していき、やがて火は消えた。

「「……」」

「「あああああ！！！」」

＊＊＊

「蝋燭が消えたため、この勝負は引き分け。罰として、銀さんと十四郎さんは野宿。……それにしても、情けないわねあなたたち」

『あなたたち』の言葉の矛先はもちろん、俺とマヨラー。
野宿だけは絶対したくない俺は、なんとかマヨラーに罪をきせようとした。

「だいたいお前が悪いだろ！蝋燭斬ったのはお前じゃん！」

「なっ……！それは幽霊見て、手元が狂っただけだ！」

言い争いを始める俺たち二人を宥めるように、神那が言った。

「はいはい、わかったから。……それで、神楽と総悟くんは？」

そう言われて、神楽がいないことを思い出した。

確か、手分けして蝋燭を探そうと言われて別れてから、その後ずっと姿がない。
それを神那に伝えると、マヨラーも『そーいや総悟も途中からいなかった』と続ける。
すると、やっぱり影の薄い新八が幽霊旅館を見ながら言った。

「あの、二人ともあそこにいますよ。……なんか、変なのいっぱい連れてますけど」

変なの？
何？変なのって。
旅館に視線を戻すと、ありえない光景が広がっていた。
……神楽と総一郎くんが、たくさんの幽霊を引き連れながらこちらに走ってきているのだ。

「銀ちゃん、見て見て！私、幽霊と友達になったヨ！すごいでショ！？」

「チャイナ、てめーは甘いねィ。俺ァ下僕でさァ」

そう言いながらさらに近づいてくる二人＋その他もろもろ。
俺とマヨラーは、同時に叫んでいた。

「「こっち来るなァァァァ！」」

＊＊＊

「なんか俺ら、野宿でよかったのかもな」

「……違ェねー」

そう言いながら、旅館を見る。
中から笑い声が響いてきていて楽しそうだが、実際、その中には幽霊もまじっているわけで。
そう思うと、幽霊がいない野宿でよかったのかもしれないと思う。
真っ暗で、何も見えないが。
そして、ふと思い出した。

「…そーいやお前、煙草吸うからライターあるじゃん。明かりつけろよ」

「ああ？……ちっ、面倒臭ェ」

そう言いながらも、ライターを取り出すマヨラー。
……やっぱ、こいつも怖いんだ。
俺が思っていることを察したのか、マヨラーはギロリとこちらを睨んできた。
いいから早くつけろよ、そう言うと、シュボッと言う音とともに、辺りが照らされた。
……そしてそこにいたのは、またまた幽霊さん。
固まる俺たちを見て、自分の存在に俺たちが気づいたことを悟ったのか、にんまりと笑いながら言った。

（君たちも、あっちで一緒に遊ぼうよ）

「「……」」

「「…あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」」

……どうやらここは、幽霊の宝庫のようです。

もう二度と、こんなところには来ないと誓いました。坂田銀時

……作文？

楽しいこともつらいことも全部含めて『思い出』（下）（後書き）

とりあえずこの短編はこの3話で終了です。
3話は長すぎたかなあ、やっぱ。

次回は神那の過去に迫るつもりです。
それでは、次回をお楽しみに！

誰にでも思い出したくない過去がある

――見て見て、母さん。かわいいね、このお花。

――ほんとね。でも不思議、このお花がこんな色をしているの、初めて見たわ。

――そうなんだ。珍しいなら、家に持って帰ろうよ――

はっ、と目が覚めた。
ぐっしょりと汗をかいていて、気持ちが悪い。

「…夢、か……」

そう呟く。
布団から起き上がり、私は銀さんの寝室を覗き込んだ。
銀さんは大きないびきをたてて爆睡している。
しばらく見つめてから、今度は神楽の寝ている押し入れの扉をそっと開けた。
銀さんとは違って、スースーと規則正しい寝息をたてている神楽の頭をゆっくりと撫でる。
ずきん、と胸が痛んだ。
……私はまだ、この子に隠していることがある。

いつかは話そうと思ってる。
でももし、私が話す前に、この子がそれを知ってしまったら？
この子は、私を受け入れてくれるだろうか？
……いいえ、きっと無理。
それくらい、私がしたことは重い『罪』なのだから。
そう思いながら神楽の頭を撫でていると、後ろに気配を感じて振り返った。
眠そうに欠伸を一つかいた定春がお座りをしている。
定春は、くうん、と弱々しく鳴いた。
私を心配してくれているのかもしれない。

「……ありがとう。平気よ定春。それじゃ、私寝るね」

定春は安心したのか、ソファーに飛び乗り寝そべった。
それを見届けてから、私は寝室に戻った。
布団に入り、目をつぶると、案外簡単に眠りにおちた。

＊＊＊

「神那姉、なんかあったアルカ？元気ないみたいだヨ」

「……そう？気のせいよ」

午後に神楽と散歩することは、もはや毎日の日課。
行ったことのない場所に行って、新たな発見をする。
それが神楽にはたまらなく楽しいようだった。
……本音を言うと、あんな夢をみたものだから、今日はあまり気が進まなかった。
まあ、神楽の無邪気な笑顔が見たいから来てしまったのだけれど。
ふと神楽に目をやると、何かを見つけたようで、神楽は歓声をあげ

た。

「わあ……！みてみて、神那姉！いっぱいお花咲いてるアル！」

…ああ、これも神様の『罰』だと言うのかしら。

あんな夢をみた後に、お花畑に来させるなんて。

今はどんな花も見たくないというのに……。

そんなことを神楽に言ったら心配されてしまうだけ。

だから、『きれいね』とそれだけ返しておいた。

神楽は『うん！』と嬉しそうに言いながら花に顔を向ける。

「これは向日葵で、あっちは彼岸花でショ？……う～ん、あとは知らないお花ばっかアル」

ぶつぶつ言いながら花と格闘する神楽を横目で見ながら、私も近くにあった一輪を摘んだ。

「……いい匂い」

私が摘んだ花は、梔子（くちなし）という白い花。

花言葉は『喜びを運ぶ』。

自分で言うのもなんだが、案外花には詳しかったりする。

……でも正直、『白い』花は嫌いだ。

だけど、この花の匂いにつられて摘んでしまった。

それを手のひらの上で弄んでいると、神楽が私を呼んだ。

「神那姉～！これ、なんていう花アルカ？」

それはね、と答えようとして私は凍りついた。

その花は、その花は……！

「ッ……だめよ神楽！その花は……！！！」

「……えっ！？」

神楽は反射的に花を離す。
神楽の手から落ちたその花は、ゆっくりと地面に落ちた。

「…神那姉……？このお花、危ないアルカ？」

そう言われて、はっとした。
……違う。
これは、あの花じゃない。
確かに似ているけど、色が違う。

「……見間違え、したみたい。…それは、アサガオっていう花よ」

「アサガオ……」

神楽は小さな声で復唱する。
平静を装って返したが、内心私は気が気ではなかった。
……思い出してしまった、過去の忌まわしき記憶を。
……私の、『罪』を。

「……神楽。私、今日調子悪いみたい。今日はもう帰らない？」

「……ウン。神那姉、今日は顔色悪いし、なんか変アル。帰った方がいいヨ」

そう言いながら、神楽は私を万事屋まで送ってくれようとする。

だけど、私は少しでも神楽から離れたかった。
……なんだか、申し訳なかったから。

「…神楽、平気よ？あなたはここでもう少し花と語り合いなさい」

「……？」

「だから私は一人で帰れるから。あなたは花を学ぶの」

「はあ！？そんなの心配アル！だいたい、花を学ぶとか花と語るとか、意味わかんないネ！」

「花に触れるだけでもいいから。……わかったわね？神楽」

有無を言わせないような物言いをしたせいか、神楽は黙りこんでしまった。
そして小さく、わかったと言う。
私は、よろしい、と言いながら背を向けた。

「……あ、晩ごはんの時間には帰るのよ～」

「わかってるネ！！！」

ムキになった神楽の返事に微笑んだ。
手を振りながら『頑張って』と言うと、神楽も思い切り手を振り返してきた。
そして私は神楽に背を向けて歩き出す。
後ろから『よーし、頑張るぞ！』と元気な声が聞こえてきて、また笑ってしまった。
そして、私は家路に向かった。

……そうよ神楽。
あなたはもっともっと、いろいろなことを学びなさい。
誰かを助けるために。
私と同じ、『罪』を犯さないためにも。

誰にでも思い出したくない過去がある（後書き）

……はい、神那の過去にちょっとだけ触れました。
なんで『アサガオ』なのか、そこにはもちろん理由があります。
ネタバレになってしまうので、ここではまだ言えませんが。
ということなので、次回も楽しみにしててくださると幸いです。

それではまた！

何事においても意味を知ることは大事

「あっ！神那姉、シャボン玉やってるアルカ！」

私が『ええ』、と答えると、台所から新八くんも出てきた。

「……うわあ、懐かしいですね、シャボン玉。小さい頃によくやってたなあ」

「…新八、お前いくつ？昔の懐かしみ方がおじいさんみたいになってんだけど」

「失礼ですね、銀さんより何歳若いと思ってるんですか？」

「いやいや、銀さん心はまだ少年だし。めちゃくちゃ澄みきってるからね」

「嘘つくな！！！」

そんな言い争いを聞きながら、またシャボン玉を吹く。

いろいろな大きさのシャボン玉が、太陽の光に照らされてキラキラと輝いていた。

それを見た神楽は歓声をあげ、『私にもやらせて！』とせがんでくる。

ストローを手渡すと、神楽は嬉しそうにそれを受け取り、吹いた。

しかし強く吹きすぎたせいか、あまりうまくシャボン玉ができていない。
優しく吹くのよ、とアドバイスを言ってあげると、今度はうまく吹けたようで、シャボン玉が宙に浮いていった。
その中でも、一際大きいシャボン玉があり、神楽はそれを目で追っていた。
しかしやはり、シャボン玉は割れるものなので、しばらくしてパチンと割れてしまった。

「あっ、割れちゃったアル」

神楽はそう残念そうに言う。
他のシャボン玉も、次々と割れていった。
私は、屋根のところで割れたシャボン玉を見て、あっと思った。

「…ねえ、あなたたち、『シャボン玉』っていう歌知ってる？」

「童謡の、ですか？」

そうよ、と答えると、新八くんは知っていますと答えた。
しかし、他の二人は首をかしげるばかり。
子供であり、地球人ではない神楽は仕方ないとして、どうして銀さんは知らないんだろう……。
ほんとにこの人、『常識』っていうものがないのかしら。
そう思っていると、シャボン玉の歌を知らない神楽は、『歌って！』と私に言ってきた。
恥ずかしいなあと思いながらも、私はみんなに歌ってあげた。

――シャボン玉飛んだ

屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで
こわれて消えた

シャボン玉消えた
飛ばずに消えた
産まれてすぐに
こわれて消えた
風、風、吹くな
シャボン玉飛ばそ――

歌い終わると、パチパチと拍手が起こった。
新八くんが言う。

「…すごいですね。神那さん、歌うまいです」

「そう？ありがとう」

「だな。新八とは比べ物になりゃしねーや」

「どういう意味ですか、それ」

「そーゆう意味ヨ、ダメガネが」

「誰がダメガネだ！！！」

そうやって言い争う三人を横目に、私はまた新たにシャボン玉を作る。
ふわり、と空に昇っていくシャボン玉は、またパチンと割れた。

依然として言い争っている三人に静かに言う。

「……あなたたちは、この歌を聞いて何が思い浮かぶ？」

三人は動きを止めて、きょとんとした顔になる。

私はそれを笑いながら、まずは神楽、そう言った。

神楽は即座に答えた。

「子供が楽しそうに外でシャボン玉吹いてるところ！」

その答えに神楽らしいな、と思った。

次は新八くん、と言うと、新八くんは戸惑いながらもゆっくりと答えた。

「……僕は、神楽ちゃんと逆ですかね。割れるシャボン玉を見ている子供たちが残念がっている様子、でしょうか」

「……じゃあ、最後に銀さん」

そう言うと、銀さんは頭をボリボリと掻きながら言った。

「……俺ァ、シャボン玉が魂みてーに聞こえる。空に昇っていくシャボン玉が、死んだ奴の魂みてーに」

……本当に、みんならしい答えが返ってきた。

この中に正解があるのかはわからないが、その一説は知っている。

神楽が『答えはなにアルカ！？』と聞いてくるので、それを答えることにした。

「さあ？本当の答えはなんなのかしらね。私も詳しくは知らないけ

ど、この歌の歌詞には意味があるらしいの。その一説を話すわね」
いつの間にか全員がちゃんと座り、じっとこちらを見つめていた。
さっきまで喧嘩してたくせに、と心の中で笑った。
そして、私は続けた。
「……この歌は、死んだ子供への鎮魂歌らしいわ」
「鎮魂歌ってなにアルカ？」
不思議そうにそう問う神楽に答える。
「鎮魂っていうのは、魂を静めて落ち着かせること。鎮魂歌はその歌のことよ」
私はさらに続ける。
「この歌の作詞者の娘は、幼いときに亡くなってしまったそうよ。歌詞の中の『産まれてすぐにこわれて消えた』は、娘が生まれてすぐに死んでしまったことを意味しているの。そして、『風、風、吹くな、シャボン玉飛ばそ』っていうのは、天国まで無事に娘の魂が届くように祈った言葉だそうよ」
そう言うと、全員が知らなかったというように『へえ～』と声をもらしていた。
新八くんが感心しながら言う。
「そんな意味があったんですね。全然知りませんでした」
「あくまで一説だけどね」

「一説でもなんでもいいアル！とにかく、この歌を作った人の気持ちを知れってことでショ？」

「そういうこと」

「……そうだな」

「はい！」

神楽は台所から新しく三本のストローを持ってくる。
人数分そろったストローを一人一本ずつ持ち、全員でシャボン玉を作った。
一人一つ、大きなシャボン玉が空へ昇っていく。
それを見ながら皆が何を思っているのか、それはわからない。
でもきっと、自分の大切な人の顔を思い浮かべているのだろう。
私もシャボン玉を見上げた。
そして空高く昇ったシャボン玉は、やがてパチンと割れた。

何事においても意味を知ることは大事（後書き）

近所の子供がシャボン玉で遊んでるのを見て思いつきました。
調べてみたところ、シャボン玉の歌にはこんな意味があったんですね！
私も初めて知ったよ新八！（笑）
他の童謡にもいろんな意味があるようです。
ぜひ、調べてみてください！

……まあ、江戸時代にはまだこの歌はないわけですが。
なんでもアリの銀魂ですからね！
そこはスルーしてください↑

これから更新が遅くなっていくと思います。
読者の皆様、すいません！
これからも、温かい目で見守ってくだされば と思います。
それでは、次回をお楽しみに！
感想もお願いします！

母とはやっぱり偉大な存在（前書き）

神那の過去話です。
短いです。
それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

母とはやっぱり偉大な存在

私は幼い頃、地球でいう『小学校』のようなところに通っていた。
私たちの星は、地球と違って義務教育などはなかった。
でも私はそこに通っていたのだ。
仕事でいない親父に変わって、女手一つで私を育ててくれる母さんを、喜ばせたかった。
……成長した自分を母さんに見せてあげることで。
幼い私はそんなことで喜ばないかもしれないという不安はなかったのだろう。
何の迷いもなく、最初はそこに通った。
……これは、その時の話だ。

＊＊＊

「ほら神那ちゃん、もう少しよ、頑張って」

「頑張れ神那ちゃん！」

「頑張れ～」

先生に続いて、私に声援を送るクラスメイトのみんな。
普通の人は声援を送られることを嬉しいと思うのかもしれないが、私は違った。
……『頑張れ』っていう言葉は嫌い。

私はこんなに頑張ってるの、でもできないの、無理なの。
それなのにまだ、私に『頑張れ』って言い続けるの？
そう思うと、なんだか涙が溢れてきた。

こんなこともあった。

「先生ー！また神那ちゃんが泣かせてるー！」

クラスメイトのその声を聞いた先生が、ドタドタドタ、と奥からやってくる。

「……こら、神那ちゃん！いつもいつも、暴力を振るうのはやめなさいって言ってるでしょ！？」

「…だって先生、それはあっちが最初に「とにかく、ちゃんと謝りなさい！」

……この担任（ひと）は嫌いだ。
いつもいつも、私が悪いことをしたって言う。
私が何を言ったって、聞いてくれやしない。

「……ごめん、なさい」

ここで謝らないと、きっとここから出てけって言われる。
そう思い、自分は悪くないと思いながらも、形だけ謝った。
気まずい雰囲気が流れ、耐えきれなくなった私は、部屋から出た。
今日はこのまま帰ろうか、そう思ったが、それではなんだか自分が負けを認めたようで悔しかったので、戻ることにした。

部屋に入ろうとドアを開けようとしたが、何か話し声がしてドアノブを回そうとする手を止めた。
いけないことだとわかっていたが、ドアに耳をくっつけ、話の内容を聞いてしまった。

「……まったく、これだから嫌なのよ。星海坊主の娘」

「先輩、星海坊主って誰なんですか？」

「アンタ知らないの？星海坊主ってゆーのは、宇宙最強の掃除屋」

「えっ！？それって……じゃあ、あの子も夜兎ですか？」

「そう。なんで夜兎族なんかがこんなところに通ってるのかしらね。いつか私たちも殺されるかもしれないわ」

「そんな死に方なんて嫌です！」

「そうよね。だから早く出ていってくれたらいいんだけど」

この声は担任と、最近来た若い新人の先生。
……それにしても、二人が話してるのは……私の、こと？
そんな風に、思ってたんだ。
別に知らなかったわけじゃない。
ただ、直接聞いてしまうと、無性にむなしかった。
…気づくと、私は走って家に向かっていた。
そんな自分を情けないとも思ったが、泣いているところを見られる

よりはマシだろう、と思うことにした。
家に着いて荒々しく玄関の扉を開けると、家事をしていた母さんが驚いたようにこちらを見た。
「あら、どうしたの神那？帰ってくるにはまだ早いじゃない」
「…母、さん……！」
私はそう言って、母さんに抱きついていた。
母さんは驚いていたが、何も聞かずに頭を撫でてくれた。
私はさっきのことを思いだし、大声で泣いた。
私が泣き止んだ頃、母さんは言った。
「……神那。あなた、無理をしてるんじゃない？あそこで」
あそことはもちろん、学校もどきのこと。
母さんにはなんでもお見通しなんだな、そう思ったが、心配をかけたくなかったので、否定した。
「そんなこと、ないよ」
「嘘。頑張りすぎてるのよ、あなたは。無理してあんなところに行く必要はないのよ？」
「だから、そんなこと「神那」
静かに私の名を呼ぶ母さんの顔を見た。
真剣な、でも優しい顔。
母さんは言った。

「頑張らなくていいの。あなたはまだ、子供なんだから」

＊＊＊

そのとき、私はあの人のその言葉で気づかされた。
私はまだ頑張れる、無理なんかじゃない、って。
『無理』という言葉を使ったからできなかったんだって。
…そして、あの人のその言葉に、私は救われたんだ。
……私はあの人に、いろんなことをもらってばかりだった。
そんなあの人に、私は何かしてあげられただろうか。
もしそうだとしたら、それはいったいなんだったんだろう。

この世界に同じ人間なんていやしない、ＤＮＡなめんなよコノヤロー！！！

タイトルが意味わかんないのはスルーしてください。
とゆーか、まったくあってない気がします、文章にｏｒｚ

それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

「神楽ー、電話でてくれるー？」

今日の万事屋では、珍しく朝から電話が鳴った。
電話が鳴ること自体久しい感じもするので、依頼かもしれないと心が踊る。
……だって私、なんだかんだで依頼受けたことないし。
ここに来てからというもの、今までの依頼すべてがそんなに人数のいらない依頼ばかりだったから、私はいつも留守番をさせられていた。
だから今日こそは、そう思った。
電話を終えたようで、神楽は私のところに歩みよってくる。

「ありがとう。……それで、誰だったの？」

「依頼だって。人探してほしいみたいアル。詳しくは明日うかがったときに話すから、って言ってたヨ」

「そう。久々の依頼ね」

冷静に返したつもりだったが、内心は嬉しさが言葉に表れてしまわないかとヒヤヒヤした。
人探しなら人数は必要だろうし、私も依頼を受けることができる、そう思った。

＊＊＊

「初めまして。今日は万事屋さんに、人探しの依頼を頼みに参りました」

そう言って現れた人物は、私より年齢は少し下ぐらいの青年。
名を聞いたが、青年は職業上、本名を名乗れないらしい。
だからここでは『岡本』と呼んでください、そう言った。
おそらく『岡本』という呼び方にたいした意味はないのだろうが、
なぜその呼び方なのだろうと少し疑問に思った。
とりあえずそこはスルーして、詳しい依頼内容を聞いた。

「探してほしい人物は、この人物です」

岡本さんは、懐から取り出した写真を見せた。
そこには、一人の人物が写っていた。
後ろ姿だし、辺りは暗いのでよくわからなかったが、髪を後ろの低いところで一つに結んでいる。
女性かな、そう思った。

「……あの、岡本さん。この人は今どこに？」

そう言う新八くんに、岡本さんはさあ、と返す。
なんでもこのかぶき町にいることは確かだが、どこにいるのかまではわからない、とのこと。

「じゃあどうやって探せっていうアルカ！！！」

「あなたたちに任せます。それがあなたたちの仕事でしょう？」

そう言う岡本さんに、神楽は何も返せなかった。
嫌な依頼人だな、そう思いながら私は言った。

「……人探しですね、わかりました。その依頼、承りまし「あ、ちょっと待ってください」

「「……？？？」」

疑問符を並べる私たちに、岡本さんは言った。

「その人物を探してもらうだけが私の依頼ではないのです。……その人物を見つけ、殺していただきたい」

「……は？」

しん、と沈黙が続く。
最初に口を開いたのは銀さんだった。

「オイオイ、岡本さんよォ。冗談は他所でやってくれます？」

「冗談ではありません。報酬も、この通り」

そう言いながら、岡本さんは持っていた鞄から封筒を取り出す。
その中には、かなりの札束が入っていた。
ゴクリ、と誰かが唾を飲み込む音が聞こえた。

「……アンタが本気なのはわかった。でも、こういうのはプロの殺し屋に頼むべきなんじゃね？」

「プロならいるではありませんか。私の目の前に」
銀さんの言葉にそう返した岡本さんは、私を見る。
それに気づいた皆も、私を見る。
…てゆーか……え？わたし？
「……ちょっと待ってください、岡本さん。私、殺し屋じゃないですよ？」
「そうアル！神那姉が殺し屋なわけ「おや、違ったのですか。こんなに濃い血の臭いがするのに」
「……！！！」
「…ああ、白髪のあなたも相当のようですな。……だが、彼女には遠く及ばない」
「……アンタ、なんでそんなことわかんだよ？」
銀さんがそう言うと、岡本さんは嗅覚だけはいいので、そう答えただけだった。
……違う。
嗅覚がいいとか悪いとか、そんな話じゃない。
だいたい、私が手を血に染めていたのは、何年前の話なのだろう。
私はとっくに、そっちの道からは足を洗った。
この人、何者……？
またしばらく沈黙が続いた。
口を開いたのは、今度は銀さんではなく岡本さんだった。
「……なるほど。白髪の方の言う通り、ここは殺しのプロに任せた

方がいいですな。では、あなたにこの依頼、お任せします」
そう言って、私に頭を下げた。
私は返答に困っていたが、銀さんが『ちょっと失礼』と言いながら私たち全員を呼び、隣の部屋に入れた。
……万事屋作戦会議、みたいな？
銀さんは言う。

（おい、どーすんだコレ？絶対断った方がいいだろ）

（当たり前じゃないですか。なんだかあの人、危険な感じします）

（新八の言う通りアル！ね、神那姉！？……神那姉？）

口を開かない私を心配したのか、神楽は私の顔を見つめる。
確かに、危険な臭いはする。
だけど……。
私は決心をし、言った。

（……私、受けるわ。この依頼）

（はあ！？何言ってんだ！）

（あの人の正体を掴むには、それしかないじゃない。……それに、私が人を殺すわけないでしょう？大丈夫よ）

みんな納得していないようだったが、説得を続けると、ようやく承諾してくれた。
襖をガラリと開けて、言う。

「岡本さん、わかりました。その依頼、お受けいたしましょう」
「そうですか。ありがとうございます。これは前金ということで、お受け取りください」
そう言って、さっきとはまた別の封筒を取り出す。
そして、その人物は席を立った。
ゆっくりと玄関に向かっていく岡本さんを、全員無言で見つめていた。
そして岡本さんは出ていきざまに、何かを思い出したように振り返ってから言った。
「ああ、そうだ。失敗した場合は、そうですな……。ここにいる誰かが、死ぬかもしれませんね」
「え……？…ちょ、岡本さん！待ってください！それはいったいどういう「では、失礼」
そう言って、玄関から出ていく岡本さん。
しばらく固まっていた私たちだったが、やがて口を開いた。
「……あの人、何者だったんでしょうか？」
「わからないネ。……でも最後、私アイツから殺気を感じたネ」
……神楽の言う通りだ。
岡本さんが『誰かが死ぬかもしれない』と言ったとき、強い殺気を感じた。
あながち本気なのかもしれない。

「……やるしか、ないのかしら」

「神那姉……」

「…神那、お前はそれでいいのかよ？」

「仕方ないでしょ？……やらなきゃ、私たちの誰かが死ぬことになるのよ」

決意を込めた目で銀さんを見つめる。
だが、銀さんは頷かなかった。

「だめだ。……誰かを殺してまで生きたいとは俺は思わねェ。お前らもそうだろ？」

そう言うと、神楽も新八くんも、こくりと頷いた。
銀さんは続ける。

「……神那、お前もそうなんじゃねーの？」

「……そんなの、当たり前じゃない」

「よし、じゃあ決定。そいつを見つけ次第、確保するぞ。殺すのはもちろんなしだ」

返事をする神楽と新八くん。
だけど、私は頷かなかった。
…もしかしたら……みんなに危険が迫ったら、私は殺してしまうのではないだろうか。
ザワ……と、体の中で血がたぎった気がした。

この世界に同じ人間なんていやしない、ＤＮＡなめんなよコノヤロー！！！

今回も（上）（中）（下）と三話にするつもりです。
次回は『彼』が登場です！
気になる方、ぜひ次回もお楽しみに！！！

この世界に同じ人間なんていやしない、ＤＮＡなめんなよコノヤロー！！！

残酷表現あります。
苦手な方は注意してください。

それではどーぞ（＾Ｏ＾）！

『写真の人物』を探す日々が続いた。
私たちは朝から晩までいろいろな人に聞いてまわった。
依頼に時間制限があったわけではないが、とにかく早く見つけなければならない、そう思うのだ。
それは依頼主を『危険』だと私たちが判断しているからなのか、よくわからないが。
そして捜索を始めて、二～三週間が経った頃だった。

「……あ。私、その人見た気がします。この先の通りを右に曲がったところだったかな」

ついに、目撃情報が出た。
女性に礼を言うと、その場所まで走った。
神出鬼没なのだ、またいついなくなるかわからない。
すると、人通りの多いその道に、ひときわ目立つ格好をした人物がいた。
色とりどりの着物を着ている周りの人たちに対し、その人は黒。
黒いマントのようなものをかけているのは写真と同じだが、頭には笠をかぶっていた。
暑苦しいな、そう思いながら、こっそり追いかける。
その人物を目で追うのに気をとられていた私は、誰かと肩があたってしまった。
視線は動かさないまま軽く謝り、その場を離れようとした。

……しかし。

「……おや、万事屋の方。奇遇ですね」

「……岡本、さん」

そう、肩があたった人は岡本さんだった。

本当に偶然なのか疑問に思ったが、とにかく今はあの人物を追いたい、そう思った。

「岡本さん、ごめんなさい。今、忙しいので」

「私が『殺してほしい』と頼んだ人物、見つけたのでしょう？」

「……！！！」

「隠さなくてよいのです。そうなのでしょう？」

「……はい」

「それでは、依頼した通りお願いいたします。……わかってると思いますが、やらなければあなた方の誰かが死ぬのです。そうですな……チャイナ服を着ていた少女、なんてどうでしょうか？」

ばっと後ろを振り返ると、不気味に笑っている岡本さんの顔があった。

……もう、私には選択肢などなかった。

もう……やるしか、ない。

「…わかり……ました」

「結構。……ああ、今そこの路地裏に入ったようです。早く追わなくては」

私は静かに頷くと、走ってターゲットを追いかけた。
なんだか岡本さんの手の上で踊らされている気もするが、こうなったら最後まで踊ってやる。
そう思いながら、人気の少ない路地裏へと入っていくその人物を追いかけていく。
角を曲がろうとして、私は急停止した。
壁のかげからこっそり覗くと、何をしているのか、その人物はその場に突っ立っていた。
ピクリとも動かないその人物に、私はチャンスだと思った。
ゆっくりと背後に近づき、番傘を握りしめる。
その手には、じっとりと汗が滲んでいた。
……仕方ないのよ。
私がこの人を殺さなきゃ、神楽が死ぬの。
私は、神楽を守るって誓ったの。
……だから。

（……ごめんなさいッ！！！）

心の中でそう叫びながら、私は番傘をその人物の胸の中心へ突き刺した。
……だが私は、何かがおかしいと思った。
傘を突き刺した感触も何か違うように感じられたし、何より……血が、出ていない。
どうして、その言葉だけが頭の中を駆け巡っていると、頭上から声がした。

「よくできましたー。やっぱりアンタも俺たちと同じだね」

「……！？」

見上げると、そこには一人の男が立っていた。
日傘をさしていることに気づいた私は、それに注目した。
その傘は私と神楽と同じ色をした傘。
神楽が生まれたとき、三人でお揃いにと母さんが買ってくれた物。
まさか……！！！

「神威……！？」

その人物……神威は、ケタケタと笑う。
そして、正解、と言った。

「覚えててくれたんだ、姉さん」

「……」

「まあ、神楽のためとはいえまた血に染まろうとしたんだ、上出来だよ。……やっぱり、姉さんも俺たちも変わらないんだ。姉さんも、こっち側なんだよ」

「……違うわ。私はアンタたちみたいに身勝手に人は殺さない。私は神楽のために「殺そうとしたなら、それはもう同じだよ」

そう言われて、私は押し黙ってしまう。
否定、できなかった。
やはり私も夜兎、血には抗えないということなのか。

「そうかも、しれないわ」

「そうでしょ？」

「でも神威、アンタ、何しに来たのよ？こんなオモチャまで用意して」

足元に転がっているそれを思い切り蹴飛ばした。
……そう、私がターゲットと思って追いかけていたのは、ただのロボットだった。
しかも、神威の手にはリモコン。
なるほど、神威が操作してたってわけね。
それなら……。

「ちょっと岡本！そこで神威のかげに隠れてるんでしょう！？出てきなさいよ！！！」

そう言うと、どうしてわかったの、とでもいうように驚いていた神威。
後ろを振り返り、おーい、と呼ぶと、後ろから岡本が出てきた。

「ほう、よくわかりましたね」

「そりゃあわかるわ。あれだけ強い殺気を向けられれば」

「ふふ、そうですな。……ああ、自己紹介がまだでしたね。私は」

岡本がそう言っている途中で、大量の血しぶきが舞った。
その血は頭上からふってきて、私はそれをかぶってしまった。
それに続き、ゴトン、と地面に何かが落ちる音。

…それは……岡本の、頭。
見上げると、神威は血に染まった右手をぺろり、と舐めながら言った。
「用済みだからもういらないや。……あ、でも自己紹介だけはしといてあげようかな。そいつは」
神威が言い終わる前に私は一瞬で神威のもとに移動し、首に傘を突き立てた。
神威は未だ笑みを崩さない。
「……アンタ、命の重みって考えたことないの？」
「さあ？少なくとも、命を奪うことに抵抗はないよ」
「……もう一つ聞くわ。なんで、アンタみたいな春雨第七師団団長様がこんな地球（ほし）にいるのよ？私を追いかけてきたってわけ？……なに、アンタってシスコンだったの？」
「そんなわけないだろ。だいたい、姉さんもシスコンじゃん。神楽に」
「……ふふ、そうね」
二人で笑い合うが、心の底からは笑えていない。
神威は言った。
「俺、そろそろ帰るよ。勝手にここまで来ちゃったから、これ以上長居したら元老になに言われるかわかんないし」

「……私がこのまま逃がすと思う？」

「逃げるよ。力づくでも」

そう言って、神威の手刀が私に近づく。
私は後方にとんでそれを避けたが、いつの間にか、神威が後ろにいた。
振り返ったときには神威の蹴りが顔に近づいていて、傘でそれを防いだが、あまりの強さに吹き飛ばされてしまった。
壁に激突して、口の中で血の味がしたのでそれを吐き出した。

「いったいわね……！何すんのよ神威！！！」

怒りを言葉にすると、神威が笑いながら言った。

「やっぱり姉さんは神楽と違って丈夫だね。俺はもう行くけど……次に会ったときは、俺と戦ってよ？姉さんはきっと俺を楽しませてくれる、って期待してるから」

「…期待してる、ですって……？アンタね、それが姉貴に向かって言う言葉なの！？」

「まあ、細かいことは気にしないで。それじゃねー」

「あ、コラ待ちなさい神威！！！…痛ッ……！」

くらりと目眩がしてその場にしゃがみ込むと、頭から血を流していることに気づいた。
壁に寄りかかって息をはくと、自分も歳をとったなあ、なんて場違いなことを思った。

「神威……」

あの子はもう、以前のあの子じゃない。
私にはもう、手におえないのかもしれない。
もう、家族全員で暮らすことは不可能なのだろうか。
そんなことを思いながら、私はぎゅっ、と拳を握りしめた。

しばらくその場に座り込んでいた私だったが、誰かが通報したのか、パトカーが近づく音が聞こえてきた。
この状況を見られたら、絶対私が岡本を殺したって思われるな。
だって、全身血だらけだし。
神威…次に会ったら覚えておきなさいよ……！
腸が煮えくり返っているような思いをしているとき、パトカーに引き続いて誰かが走ってくる音が聞こえた。
……やば、たぶん真選組だ。
そう思って立ち上がろうとしたのだが、体がうまく動かない。
そうこうしているうちに、十四郎さんと総悟くんを含めた、真選組が目の前に現れた。

「神那の姉御…こいつァ……」

そう言う総悟くんに、私は一言だけ返した。

「えっと……とりあえず、お勤めご苦労様です……？」

＊＊＊

「……って、他に言うことがあんだろーがァァァァ！！！」

そう怒鳴るのは銀さん。

私はすでに万事屋に戻ってきていた。
真選組の皆には事情を説明して、なんとか信用してもらえた。
ついでに万事屋まで送ってもらった、という始末。

「ったくよー、ただでさえ見たくねー奴らの顔、いちいち見させんなよまじでー」

「……ごめんなさい」

「……ま、反省してるなら銀さん許すけどさ」

そう言いながら、お茶をすする銀さん。
一口飲んでから湯呑みをテーブルの上に置くと、『それで？』と聞いてきた。

「それでって……何が？」

「いや、だから俺らさ、何があったかまだ聞いてないんだけど」

そう言われて私は、あ、と声をもらす。
いろいろ混乱しすぎて、言うのを忘れてた。
私は静かに頷くと、まずは神楽の方を向いた。

「…神楽……私ね、神威に会ったの」

「……え？」

そこで私は皆に話した。
真選組から聞いた、岡本の正体、それは春雨で薬の密輸を行っていた人物だったこと。

岡本に『殺してくれ』と頼まれた人物は、神威が操作するただのオモチャだったこと。
手を組んでいた二人だが、用済みになったからと神威に殺されてしまったこと。
この頭の傷も、神威に負わされたこと。
そして、ターゲットの人物を、殺そうとしてしまったこと。

「そうよ……私、殺そうとしてたわ。機械だからよかったものの」

そう言うと、銀さんはため息まじりに言った。

「……やっぱりな。胸に何かが貫通した跡があったし」

「ええ……それ、私がやったの。殺さなければ、神楽を殺すって言われて。……神威はたぶん、私が腑抜けじゃないか知りたかったんでしょうね」

そう言うと、長い沈黙が続いた。
……やっぱりみんな、私のこと気味悪がってるよね。
こんな、簡単に人を殺そうとする人なんて。
……いいえ、私は人なんかじゃあない。
人の形をした、化け物なのよ。
そう思っていると、神楽が神那姉、と私の名を呼んだ。
「……私、神那姉に大事に思ってもらってるのわかるアル。すごく嬉しいヨ。……でも、人の命を奪うことだけはだめアル」

「……そう、よね」

「……私も、神那姉のこと言えないケド」

神楽の意味深なその言葉に、私は顔をあげる。
俯いた神楽と同じように、新八くんも俯いていた。
だいたい見当がついた。
それは、神楽も『誰かを殺そうとしたことがある』ということ。
新八くんは、それを見ていたということだろうか。
視線を戻すと、いつの間にか顔をあげた神楽が、まっすぐ私を見ていた。
そのまっすぐな瞳は、見つめるにはあまりにも眩しすぎて。
つい、視線をそらしてしまう。
そして、私は言った。

「私……やっぱり昔から何一つ変わってないわ。結局、私も神威たちと同じなのよ」

「そんなこと、ないアル」

そう言う神楽に、どうして？とたずねる。
現に、私は人を殺すところだったというのに。
神楽はゆっくりと答えた。

「だって神那姉、私を助けるためにやったんでショ？……でも、神威は違う。アイツは己の血の命ずるままに……自分の渇きのために人を殺してるネ」

「……殺そうとしたなら、もうそれは同じよ」

「そうかもしれない。……私も、神那姉と同じこと思ったことあるヨ。自分も神威と同じなんじゃないかって。でも私……これでも、地球(ここ)でちょっとは変わったアル。地球(ここ)のみんなが、いろんなこと教えてくれたネ」

「……」

「神那姉もきっと変われるアル。だって、神那姉はこのかぶき町の女王、神楽様のお姉ちゃんアルヨ？絶対大丈夫アル！…だから……一緒に、強くなろう？」

それでも頷けない私。
だって、こんな私が変われるだなんて、思うわけないでしょ？
すると、銀さんが口を開いた。

「…お前さァ……なに迷ってるわけ？妹にそんなこと言われて、悔しくないのかよ？」

「……」

「……つーかさ、『同じ』なんてありえねーんじゃねーの？俺らァ別々の人間、考え方も行動の仕方も違って当たり前じゃねーか」

「……それは、そうだけど」

「だろ？……それともなに？お前変わりたくねーの？」

そう言われて、戸惑ってしまう。
……私だって、変わりたい。
みんなの視線を感じ、私は大きく息を吸って、言った。

「変わりたい……！私だって変われるってこと、証明したい！」

そう言うと、みんながにっと笑った。

「よっしゃあ！じゃあ次回からは修行編アルナ！！！」

「はあ？なんだよそれ、めんどくせーな」

「だめですよ銀さん、せっかくやる気になってるのに」

「そうアル！修行～修行～みんなで修行～」

「歌うなクソガキ！！！」そうやってまた言い争いを始める三人に、クスリと笑う。

……私も、地球（ここ）でなら変われるかもしれない。

みんなが……家族がいる、地球（ここ）でなら。

いつか、神威も父さんも含めたみんなで笑いあえるときがくるかもしれない。

……私は、変わる。

変わってみせるわ。

だからみんな、ずっと近くで見守っていてちょうだいね？

この世界に同じ人間なんていやしない、ＤＮＡなめんなよコノヤロー！！！

次回は修行編！！！

たまには休息も大事（前書き）

前話、『この世界に同じ人間なんていやしない、ＤＮＡなめんなよコノヤロー！！！』のその後のお話です。
なんていうか……ごめんなさい。
それではどーぞ（；＾Ｏ＾）！

たまには休息も大事

「でも神楽、修行っていったい何やるの？」

「そんなの知らないアル！答えろヨ新八」

「他人任せ！？……僕だって知りませんよ、銀さんに聞いてください。この中でいちばん強いの銀さんでしょ？ほら、銀さん」

「ああん！？俺に聞くなよ、だいたい神那が変わりたいって言い出したんじゃん、お前が考えろ！」

「そんなこと言われたって、私、何をすればいいかわからないもの。ねえ神楽、神楽はどうやって変わったの？」

「ん～……特に何もやらなかったアル。……そうネ！新八に聞いてみるアル！万年不変の意見も取り入れるべきヨ」

「どういう意味だそれ！？つーかこの世界ドラ〇もん形式で年とんねーからみんな万年不変だわ！」

「いやいやー、そんなことないよぱっつぁん。銀さんの場合、初期の頃と多少変わってるからね。作画が定まってなくて。……まあでも、お前の場合はたいていのキャラの「ストップストップ！これ会話が無限ループになってますから！！！」

僕がそう突っ込むと、銀さんから舌打ちが聞こえた。
会話で文字数かせごうと思ったのに、その呟きはとりあえず無視した。

「だいたい、前話の後書きで『次回は修行編！！！』とか言ってたじゃないですか」

「ああアレ？アレは読者を騙そうとしただけだってよ。修行編なんかそんなもんあるわけないじゃん銀魂に」

「最低だよ！騙した挙げ句開き直りだよ！」

「ま、原作にもあったじゃん。終わる終わる詐欺とかいろいろさ。今回の俺たちは『修行やるやる詐欺』っつーことで」

「うまくねーよ！だいたいそれ、原作でもアニメでも吉原炎上篇のあとにあっただろ！……要するにパクりじゃないですか！！！」

「違いますうー、神那が加わったからこれは正真正銘のオリジナルですうー」

「理由になってねーよ！！！」

このままでは本当に会話で1話が終わってしまいそうだったので、さらに文句を続ける銀さんに言い返すのはやめておいた。
僕は神楽ちゃんに言う。

「どうするの、神楽ちゃん？神楽ちゃんも修行、やりたいんじゃないの？」

「なんか私も面倒臭くなったネ。……神那姉はもともと強いから大丈夫アル。普通に生活してても、学べることがあると思うネ」

「そう？…神楽がそう言うなら……いい、かな？」

いいんかいィィィィ！！！

おかしいだろコレ！

だってアレ、前回は結構シリアスな感じだったじゃん！

シリアスな感じで強くなりたいって言ってたじゃん！

なのにこんな単純でいいのかこいつら！

つーか作者、真面目にやれェェェェェェ！！！

僕は心の中でそう叫んでいた。

そして、収拾をつけるように銀さんが言った。

「……はい、それでは次回からは日常編、お楽しみに～」

「日常編って前もやったじゃないですか！……つーか、こんなんで終わっていいのコレ！？こんなんで1話ってカウントしていいのコレ！？」

「いいんだヨ、新八ィ。こんな感じで銀魂らしく気楽にやるネ」

「それはいいかもしれないけど」

「はい、じゃあ新八も納得したところで、修行編（仮）は終了な」

「（仮）っつーか修行編やってないじゃないですか！」

「まあまあ、落ち着いてよ新八くん。……それでは、次回からは本

当に日常編です。詐欺じゃないから安心してください」

「神那姉の言う通りネ！もし違ったら作者に苦情するヨロシ！」

「だめだよそんなことしちゃ！」

僕のツッコミを無視して、三人は声をそろえて言った。

「「「それでは今後とも、『家族の絆を求めて』をよろしくお願いしまーす！」」」

……もう嫌だ、この人たち。

人の言うこと全然聞いてないし。

……マジな苦情が本当に来なきゃいいけど、そう思った。

たまには休息も大事（後書き）

はい、本当にすみませんでした。
かなりふざけてますね。
これ前書きとか後書きですませればよかったんじゃないの？とか思った方、スルーしてください。
私もガチで思いました（笑）
次回からは真面目にやります！

酒癖が悪い奴は知り合いからも他人からも白い目で見られる

「うーい、万事屋でーす」

『あ、銀さんかい？あたしだよ、日輪』

「……げ」

またもや依頼の電話。

最近多いな、と思いながら電話に出たのだが、違ったらしい。

この人が頼むことと言えば、面倒事しかない。

「あー……悪いんだけど、俺ちょっとこれから用事が『ちょいと依頼があるのさ、詳しくはひのやで話すから今すぐみんなで来てちょうだい。じゃ、待ってるよ』

そう言って、ブツッと一方的に電話を切られた。

「……」

「どうしたの、銀さん？」

「……俺、ちょっと吉原行ってくるわ」

「はあ！？…あっ、まさか……ついに銀さんも、あんなところで人

身売買を……？」

「んなわけねーだろ！！！」

＊＊＊

「ったくよォ……どうも苦手なんだよなァ。無理やり依頼してくるところとか、面倒なことばっか言ってくるところとか。……まあ、依頼だし金もらう側だから仕方ねーけど」

「ふーん、依頼ねェ……」

吉原に続く道を歩きながら、神那は疑いを込めた目で俺を見ながら言った。

……つーか、何を疑ってんの？

まさか俺がまじで人身売買に手を染めているとでも！？

そう思っていると、新八が口を開いた。

「……にしても、日輪さんの依頼ってなんでしょうかね？」

「……私、だいたい想像つく気がするアル」

そう言う神楽に、それってどういう意味？そう問おうとしたときだった。

ガシャァァァァン！という何かが割れる音。

びっくりして音がした方を見ると、割れていたのは酒瓶。

飛んできた方向はおそらく、俺たちの目的地、ひのや。

まさか……！

そう思ったと同時に、怒鳴り声が聞こえてきた。

「オイてめーら、酒が足りねーぞォ！この世の酒ぜんぶ持ってこいコラァ！！！」

「……思った通りアル」

そう言う神楽に、うんうんと頷く俺と新八。
一人だけ状況についてこれていない神那が言った。

「やーね、こんな朝から酔っぱらい？どこの人かしら」

「……おい、神那」

「なに？」

「あの酔っぱらいがいる店、今日の依頼主の店だから」

「……へ？」

＊＊＊

あまりにも月詠がうるさいので、清太に任せて、とりあえず俺たちはひのやの一室に入った。

「…まさかと思うけど、今日の依頼って……」

「想像どおりよ。酔っぱらった月詠の相手をしてあげて」

「……アンタさ、それって不可能に等しいの理解できてる？」

「そんなこと言わずに、ね？吉原の救世主様」

そう言われて黙り込む。
すると、神那が口を開いた。
「えーと、日輪さんでしたっけ？銀さんを買い被りですよ、そんな大層なもんじゃないでしょう」
「そんなことないのよ、神那ちゃん。この吉原を救ってくれたことは事実だもの」
「へェ……銀さんがねェ……」
またもや疑いの目でこちらを見る神那。
いやいや、嘘じゃないから！
こんなところで嘘つく意味ないじゃん！
そう思っていると、清太の声が聞こえてきた。
「あっ、ちょっと月詠姉！」
その声のすぐ後に荒々しい足音がして、スパーンと障子が開け放たれた。
そこに立つのは、酒瓶を丸々一本持った、吉原のモンスター死神太夫の月詠さん。
「オイ、お前ら……あんなガキにあたし一人任せて、こんなとこにいるとはいい度胸じゃねーか」
「「……」」
「……あん？なんか知らねー顔がいるなァ。お前誰だ？」

そう言われた人物は、もちろん神那。
私？と言いながら自分を指差す神那は、なんでしょうと言った。

「自己紹介しろ」

「はあ……私、神楽の姉の神那と言います。よろしく」

「へェ、神楽の……」

そう言ってから、月詠は持っていたお猪口に酒を入れ、神那に手渡す。
それを目を丸くして見ていた俺たちは、これから何が起こるのかと内心ハラハラしていた。
月詠が神那に言う。

「……飲め」

「…え、でも……」

「……あたしの酒が飲めねーっつーのか？」

不満そうにそう言う月詠を見て、全員が思ったことだろう。
『早く飲め！』と。
しばらく黙っていた神那だったが、口を開いて言ったことは……。

「……あの、でも私、お酒飲んだことないです」

「「……は？」」

全員が声をそろえて言った。
……飲んだことがない、だって？
すると、俺の脳内で最悪の事態が浮かんできた。
それは酔っぱらった神那が月詠と一緒に暴れまわるようす。
それだけは阻止せねば。

「やっぱだめ！飲むな神那！」

俺が考えていることを察したのか、すかさずフォローを入れてくる新八。

「そっそうですよ！もしかしたらすごくお酒に弱いのかもしれないですし！」

だが、何も考えていない神楽は、それを聞いてテンションが上がったようで。

「マジでカ！私、酔っぱらった神那姉も見てみたいアル！」

「そう？……じゃあ、少しだけ」

こんの妹バカがァァァァ！！！
妹も妹！何言っちゃってんだよコイツ！
なんとか止めようと手を伸ばしたが、すでに手遅れだった。
ごくん、と神那がお猪口の酒を飲み干す音。
そして、固まる俺と新八。
頼むから酔うなよ、そう思っていると。
――――――ヒック
……嫌な汗が伝った、その直後。

「……お前らァァァ！もっと酒持ってこんかいボケェェェェ！」

…ああ、やっぱりこうなるよね。

酔っぱらった神那を見て、神楽が言った。

「キャッホォォォウ！神那姉が酔っぱらったネ！私も飲んで見ようかな、お酒」

「ばっ、神楽！お前未成年だろ！オロナミンCまでしか許さないからね、銀さん」

そう言う俺が気にくわなかったのか、神那と月詠が声をそろえて言った。

「「かてーこと言ってんな腐れテンパァァァァァ！！！」」

「ぐげっ！」

頭に酒瓶が叩きつけられ、ガシャァァァァン！という音とともに割れる。

酒を頭からかぶった俺は、恐怖からなのか寒さからなのかわからないが、ガクガクと震えていた。

「ななななにすんですか、神那さん月詠さん」

それには答えず、二人で酒を注ぎあってどんどん飲み干していく。

「お前なかなかやるなァ」

「うっふふ、あなたこそォ」

おとなしくとは言わないまでも、二人仲良く飲んでいたので、あとは神那に任せて退散しようと新八に声をかける。
そろりそろりと部屋を出ようとした、そのときだった。
俺と新八は、ガシッと首もとをつかまれる。

「おいお前ら、どこに行こうとしてんだ？」

「うっふふ、まさかあたしたちだけで飲んでろなんて……言わないわよねェ？」

そして、大きく息を吸ったかと思うと、二人同時に一気に言った。

「「……てめーらはさっさと酒つがんかィィィィィ！！！」」

「「はっ…はいィィィィィ！」」

＊＊＊

――翌日――――

「みんなありがとうね。特に神那ちゃん、また月詠の飲み友達として相手してやって」

「相手……？あの…私、昨日何したのか覚えてないんですけど」

「「知らなくていい」」

俺と新八がきれいにハモらせてそう言ったのを聞き、神那は首をかしげる。

神楽はというと……昨日から清太と遊んでいるだけで、こっちの苦労を知りやしない。

「……ところで、日輪さんよ」

「なんだい？」

「あの、ホラ……報酬のことなんですけど」

「ああ、報酬ね。ちょっとそこで待ってて」

カラカラカラ、と音をたてながら奥に消えていった。

……よし、これでしばらくは金に困らねーな。

いったいどれくらいの金をもらえるのか、そう思っていた俺だったが、日輪が持ってきたものは、俺を絶句させた。

「はい、これ」

「どーもどーも。…てゆーか……あり？なんすか、コレ？」

「何って……お酒とお菓子だよ」

何か文句でも？そう言いたげな日輪。

「はあああああ！？ちょちょちょ、待って！こーゆうのって普通、現金とかじゃねーの！？」

「ああ……すごく申し訳ないんだけど、昨日月詠と神那ちゃんが飲んだお酒の量が多すぎて、依頼金を使っちまったんだよ。なんにも渡さないのは悪いからね、それで勘弁してくれるかい？」

「あ、そっすか。それなら仕方ないっすね。……て、そんなわけあるかァァァ！オイ神那、てめーのせいだぞ！！！」

そう叫ぶと、なんで私！？と神那が言った。

日輪から、酔って何も覚えてない女の子にそんなこと言うの最低よ、と言われる。

アンタに言われたくねェ！

そう言いたかったのだが、日輪の器量からなのか、丸くおさめられてしまった。

そして、別れのとき。

「月詠も来れればよかったんだけど……あいにく、二日酔いみたいでまだ寝ててね」

「そっか、残念アルナ。……でもまた来るヨ！バイバイ」

「さようなら、日輪さん」

そう言って、新八と神楽は先に歩いていく。

神那もそれに続こうとしたのだが、立ち止まり、振り返ってから心配そうに日輪に言った。

「…なんか私、迷惑かけちゃったみたいですけど……」

「何言ってんのさ、全然迷惑なんかじゃなかったよ。また頼むね」

「……？はあ……」

少し疑問符を並べている神那だったが、また来ますと言い、神楽た

ちのもとに歩いていく。
俺も続こうとすると、日輪に一言だけ言われた。
「……銀さんも、また頼むよ」
それには答えず、振り返らずに右手だけあげた。
……そのとき、俺は思った。
コイツらの依頼はよっぽどのことがない限り、もう二度とやりたくねー、と。

酒癖が悪い奴は知り合いからも他人からも白い目で見られる（後書き）

日輪って何歳くらいなんだろう。
とりあえず月詠より年上なのは確かだから、銀さんとかよりも年上ってことですよね……？
と考えたので、日輪は神那より年上という設定です（＾Ｏ＾）！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9913u/

家族の絆を求めて

2011年10月6日22時27分発行